

# プロイセン・ドイツを訪れた 最初の清国・日本の使節団

——一八七〇年前後の英字新聞から——

黄 逸

## はじめに

バーリンゲーム  
蒲安臣使節団は1869年11月20日にオランダを経由してプロイセン<sup>1)</sup>の首都のベルリンに入った<sup>2)</sup>。それ以降、使節団はおよそ二ヵ月以上ベルリンに滞在し、外交活動のかたわら、プロイセン王室の活動を始め、ベルリンで行われたそれぞれの公式行事に参加した。1870年1月30日に使節団はベルリンを離れ、次の訪問国のロシアに向かった。1869年の年末から1870年の初頭にかけて蒲安臣使節団が訪れたプロイセンはすでに北ドイツ連邦<sup>3)</sup>の中枢となり、ドイツ領域においても統一の牛耳を執っていただけでなく、ヨーロッパにおいてもイギリスやフランスに対して対峙する新興の政治的かつ軍事的力量となった。

それ以降四年後、岩倉使節団が訪問したプロイセンはすでにドイツ統一を果たしたヨーロッパ内、かつ世界の強国である。岩倉使節団一行は1873年3月9日にベルリンに到着した。同28日にベルリンを離れてロシアを発ったにいたるまで、使節団は、約一ヵ月ぐらいの滞在のうち、ドイツ皇帝兼プロイセン国王のヴィルヘルム一世に謁見し宮廷の諸行事に参加したのみならず、ベルリンの諸機関・諸施設の見学を行った。使節団がロシアに向かった際に、副使の大久保利通は早期帰朝の途についた<sup>4)</sup>。

蒲安臣使節団のプロイセン訪問に関する英字新聞の報道は多いとは言え

ないが、英紙報道よりも米紙報道のほうが一貫性を持ってより詳細である。それは蒲安臣がアメリカ人であるためである。しかしながら、1869年12月の下旬にいたるまで、蒲安臣使節団について米紙が大きな注意を払ったのは、ベルリンでの蒲安臣使節団の活動ではなく、同年7月28日にワシントンで結ばれた清米天津条約続増条約（以下蒲安臣条約と略す）が清政府によって批准されたかどうかということである。同12月下旬、清国が条約を最終的に批准した新聞は、当年のクリスマスシーズンに入ったアメリカやイギリスに祭りの愉快感をもたらし、交渉中の清国・プロイセンの対話にも積極的影響を与えた。1870年1月の中旬、蒲安臣とビスマルクとの交渉の結果として、清国国益の尊重を前提として普清双方の広範な往来を促進することを確認したプロイセン側の受諾がプロイセン首相兼外相、北ドイツ連邦宰相のビスマルクの名義で公表された。これは蒲安臣使節団が獲得した外交的勝利であるとみられる<sup>5)</sup>。ドイツ側の承諾を受けた一ヵ月後、蒲安臣は1870年2月23日にロシアのセント・ペテルブルクで肺炎で急死した。本稿では第一に、蒲安臣条約の批准とドイツ政府声明の発表との間における英字新聞の報道を考察し、英字新聞における蒲安臣使節団の対独交渉を明らかにする。

一方、ベルリンにおける蒲安臣使節団の二ヶ月以上の滞在に対して、岩倉使節団が1873年3月9日から同28日にかけて、一ヶ月うちにベルリンを訪れた。当時、岩倉使節団のドイツ訪問をめぐって、英字新聞よりも、独字新聞で報じられたことが多くかつ詳細である。したがって、本稿では第二に、英紙 The Times の報道を主としてベルリンでの岩倉使節団の活動を考察する。

一八七〇年前後の世界は植民主義時代から帝国主義時代への大きな転換期に入ってきた。後進強国のドイツは、英仏による世界の勢力範囲に対して、ドイツの勢力範囲の開拓に目を向けた。よって、第三に、本稿では、その転換期の背景において独清・独日の接近に対する英字新聞の報道を検

討し、英字新聞の姿勢を考察する。

## 一、一八七〇年にいたるまでの独清・独日間の交渉——歴史的回顧

本論に入る前に、考察の前提として、両使節団のドイツ・プロイセン公式訪問以前のドイツ・清国・日本の三国間の交渉を概観しておこう。便宜上、下記のとおり、人的交流による独清日の初会、オイレンブルク伯爵の東アジア遠征による独日清交渉、文久遣欧使節と斌椿視察団が見たドイツ・プロイセン側面、という三つの方面が挙げられる。

### 1. 人的交流による独、清、日の初会

#### 1.1 ドイツ<sup>6)</sup>と中国の明朝・清朝

中国の明朝中葉以降、独明交渉は最初に明国に渡ったイエズス会士<sup>7)</sup>の仲介を通じて行い始めた。その中で、ドイツ出身のイエズス会士湯若望<sup>8)</sup> (Johann Adam Schall von Bell 1592-1666、以下湯若望と略す)は、東アジアで活躍した同会有志者たちと同様に、明・清交代の際に自力を発揮し、イエズス会士の立場から近世以降のヨーロッパ自然科学の明・清受容に貢献した。氏は明末の著名士人官僚である徐光啓 (1562-1633)と協力し、ローマで学んだ天文学を生かして『崇禎曆書』を完成させた。その曆書は清政権の成立後『西洋新法曆書』と改称され上梓されたのである。氏は、その曆書を編纂・訂正した際、当時ヨーロッパ天文学の正統と見なされたプトレマイオス (Claudius Ptolemaeus 約 83-168)の学説、および当時の天文学新鋭のコペルニクス (Nicolaus Copernicus 1473-1543)の学説を曆書に導入しただけでなく、全書の一部「曆法西伝」の中で、ヨーロッパにおける天文学発展史、特にプトレマイオス流の天文学について明朝の士人に簡潔に紹介した<sup>9)</sup>。一方、明・清交代の際、氏は、在明のイエズス会士が明の朝廷に優遇されたため積極的に明軍に技術的支援をしていた。1636年と1642年、二回にわたって明軍に西洋式大砲の作り方を伝習したほか、さ

らに1643年に口述でヨーロッパの火器作法、戦法などを中国人門下生に翻訳・記録させた。その記録は後に『則克録』として公刊され、清朝中葉まで使用されていたという。それは当時においてヨーロッパの火器製造技術を紹介した最初の武器専門書とみられる<sup>10)</sup>。氏は明清戦争で明の側の味方として活動したとはいえ、清政権の成立後朝廷の欽天監の監正に命じられた。そして、清世祖(1638-1661)の好感を得たため、皇帝の側近となった。清聖祖(1654-1722)の即位後、楊光先事件に巻き込まれ、カトリックの関係で「反清の邪臣」として指斥された結果、囹圄におちて死去した。その事件の影響の一つとしては、清朝は中国全土での天主教活動を禁止した<sup>11)</sup>。

プロイセンが明清中国や日本と初めて出会ったのは、十七世紀中頃のことである。当時のヨーロッパに広まっていた「中国趣味」(*goût chinois*)という影響で、プロイセン宮廷は、領邦で初めて組織的な文化芸術政策を打ち出した大選帝侯のフリードリヒ・ヴィルヘルム一世(1620-1688)を始め、中国や日本の工芸品などの品々に関心を向けるようになった。大選帝侯は、オランダの教育を受けた経験を持ったため、東アジアからの交易品を数多く目にする機会を得た。当時のオランダは、自国で本拠地を置くオランダ東インド会社(VOC<sup>12)</sup>)を通じて、ヨーロッパの対アジア貿易で優位な地位を勝ち得ていた。1663年、ベルリン近郊のオランエンブルクに中国からの磁器を中心とした磁器展示室が開かれ、大選帝侯の中国趣味の一面が窺える。プロイセンの中国趣味の証として最も重要な文化遺産は、疑いなくポツダムのサンスーシ宮殿にある中国館である。この中国館は、国王のフリードリヒ二世(1712-1786、*der Große*)の設計と監督のもとで1757年に竣工されたが、クローバーの形という特徴を持ち、館の上の塔には日傘を持った中国人の彫像が据えられていた。サンスーン宮殿の中国館に触発され、プロイセンの王族や北欧貴族などが中国風の建物を建造するようになった<sup>13)</sup>。

一八三〇年代以降、プロイセン出身のプロテスタント宣教師のカール・フリードリヒ・アウグスト・ギュツラフ (Karl Friedrich August Gützlaff<sup>14</sup>)、中国名：郭士立または郭実臘、英語風の氏名：Charles Gutzlaff、1803-1851) は 1833 年に広州で『東西洋考毎月統紀伝』という中国語の雑誌を創刊した。その中でプロイセンに関しては、「破路斯略論」というプロイセン概観に関する専論が掲載された。このように伝わったドイツ・プロイセンのインフォメーションが後の魏源による『海国図志』に参照された<sup>15</sup>。

## 1.2 ドイツと江戸期の日本

近世以降の日独交渉は、主に江戸日本の対外貿易窓口と呼ばれた出島にあるオランダ商館の蘭方医学の伝播によって行われていた<sup>16</sup>。ドイツの影響の付随的伝播は、主として当時のオランダ科学・技術の伝授を担ったドイツ人<sup>17</sup>によるものである。長崎医学史における「紅毛外科の元祖」とよばれたカスパー・シャムベルガー (Caspar Schamberger、1623-1706) はライプチヒ出身のドイツ人であり、外科医師としてオランダの東インド会社に採用され、オランダ特使とともに来日した。氏は、長崎の出島を拠点として臨床医術に関する伝授を行い、当時ヨーロッパにおいて流行っていたオランダ流外科を教え、はじめて日本人にオランダの実践的医学教育を伝えた。また氏は江戸参府を通じて、幕府に当時の先進的外科医術を示し、幕府の高官に長崎の出島にあるオランダ商館の存在の重要性を認識させた<sup>18</sup>。一方、最も蘭方医学におけるドイツの要素と絆の深い日本人は、大阪で適塾を開いた緒方洪庵 (1810-1863) である。洪庵は、蘭医として開業すると同時に、適塾において医学教育を実践し、西洋医書の翻訳に取り組んだ。洪庵の翻訳による西洋医書のうち、ドイツ語の原著は約八種に含まれているが、その基礎医学に関連する分野は生理学、薬物学、内科学である、と明らかにされた<sup>19</sup>。そのうえ、洪庵は二十年にわたってドイツ人医師クリストフ・ヴィルヘルム・フーフェラント (Christoph Wilhelm

Hufeland、1762-1836)の内科学医書“*Enchiridion medicum, oder Anleitung zur medizinischen Praxis 1833*” (オランダ語による『医学必携、臨床入門』)を和文で『扶氏経験遺訓』という全三十巻のものを重訳した。特に、その原著の第二版の末尾に記された「*Deverpligtigen des geneesheers* (医者の義務)」は、洪庵によって平易な和文で「扶氏医戒之略」として抄訳され、適塾で医学倫理教育の教材として使われた。ゆえに、蘭方医学におけるドイツの医学倫理は当時の日本医学教育に積極的な影響を与えたといえる。

オランダ商館の館医をつとめたドイツ人のケンペル<sup>20)</sup> (Engelbert Kaempfer、1651-1716) とフォン・シーボルト (Philipp Franz Balthasar von Siebold、1796-1866) は早期の独日交渉に大きな役割を果たした。ケンペルの日独交渉への貢献は、まず氏の歿後上梓された『日本誌<sup>21)</sup>』という大作を例に挙げる。『日本誌』は合わせて五巻からなる構成であり、日本の王権や宗教、国民性などについてヨーロッパやベルシアとの比較の視点から考察され、日本の具体的な姿を客観的に描きだされたものである。氏の著作は十八世紀ヨーロッパの啓蒙思想家たちの日本観の形成に大きな影響を与えた<sup>22)</sup>。

フォン・シーボルトはより幅広い領域において大活躍をしたといえる。東アジア研究を志したシーボルトは、1822年にオランダのハーグへ赴き、国王の侍医から斡旋を受け、7月にオランダ領東インド陸軍病院の外科少佐となった。1823年3月にバタヴィア近郊の第五砲兵連隊付軍医に配属され、東インド自然科学調査官も兼任した。6月末にバタヴィアを出て8月に来日し、長崎の出島のオランダ商館医となった。来日した年の秋には『日本博物誌』を脱稿した。1824年、出島の外に鳴滝塾を開設し、西洋医学教育を行い、特に日本各地から集まってきた多くの医者や学者の前で外科手術や処方などに関する臨床医学を教え、日本人医師たちから非常に高い評価を受けたのである<sup>23)</sup>。氏の貢献は、科学・技術の分野にとどまらず、日本の開国前後の外交的活動においても大活躍をした。1859年、氏はオラン

ダ貿易会社顧問として来日し、1861年に対外交渉のための幕府顧問となった。日本開国促進のために、氏が徳川将軍へのオランダ国王による開国勧告書の起草、ロシア皇帝の日本への書簡起草、日本政府とオランダおよび西欧諸国との間の条約私案作成、オランダ貿易会社の出島支店設置の計画案作成などという外交文書活動に努力した<sup>24)</sup>。氏は帰欧後、未完成の遺作『日本』において、日本という民族と国家の歴史と文化の相互作用について、政治学、地理学、宗教学、民俗学、考古学などからの近代的学術視点で論じた。氏の学術的成果はアメリカに及んで、十九世紀の日本への認識に啓蒙・啓発の役割を果たしたのである<sup>25)</sup>。氏の歿後、日本で蒐集した資料の一部は一連の取引を経て、今はライデン、ミュンヘン、ウィーンに残されている。これらは、いうまでもなくこれまでの西洋における日本学研究の発展に大いに寄与している<sup>26)</sup>。

因みに、将軍の徳川吉宗（1684-1751）が開明君主としてヨーロッパの芸術品に高い関心を持っていた。1723年に長崎のオランダ商館にヨーロッパの「油絵」の注文を依頼した。1726年の夏、動物、植物と果物、軍事行動を主題とした、五枚（合計580グルデン）の油絵が江戸に送られた。これらの油絵を描いたのはプロイセン国王フリードリヒ・ヴィルヘルム一世（1688-1740）の宮廷画家のウィレム・ヴァン・ロイエン（Willem van Royen, 1645-1723）である。これは早期独日交渉における芸術交流の逸話であるといえる<sup>27)</sup>。

## 2. オイレンブルク伯爵の東アジア遠征による独日・独清交渉

中国清朝が近代国際条約体系に巻き込まれる前に、ドイツの諸邦、とりわけプロイセンとハンザ都市はすでにアヘン戦争以前の広東貿易システムの頃より、中国貿易に参入していた<sup>28)</sup>。清英江寧条約・天津条約、及び日米和親条約と安政諸条約による清国と日本の開港開市は、プロイセン政府にとって再度東アジアにおけるプロイセンの貿易存在を拡大することを再

試することを喚起した<sup>29)</sup>。

一八五〇年代以降、ドイツ関税同盟においてプロイセンの影響力の強化を狙う<sup>30)</sup>、そしてドイツ諸邦の海外市場を開拓するために、プロイセンによる新たな東アジア政策は、1858年に摂政に就任したヴィルヘルム親王(後のプロイセン国王とドイツ帝国皇帝ヴィルヘルム一世)によって再検討された。特に1859年のイタリア統一戦争におけるオーストリアの敗北をきっかけに、プロイセンは王家海軍を整備し東アジアの貿易や植民地の開拓を着実に推進した。1859年8月18日、プロイセン政府は、清国・日本・シヤム(今のタイ国)との通商航海条約締結のために、東アジアに公式的使節団を派遣することを発表した<sup>31)</sup>。

使節団の構成は、団長であり、公使のオイレンブルク伯爵(Friedrich Albrecht Graf zu Eulenburg 1815-1881)を始め、公使館書記官一名、公使館随員三名、自然科学者三名、農業問題専門家一名、画家、スケッチ画家、写真師が各一名、商業顧問官や商業会議所代表商人などが若干である。使節団が、四隻戦艦からなっていたプロイセン東アジア艦隊の護衛で1859年10月に東アジアに向けて出発した<sup>32)</sup>。使節団が発遣された時点は清国でのアロー戦争(1856-1860)の後期である。東アジアでのプロイセン植民地獲得の可能性、また清日との条約交渉に対する英仏の立場を打診するために、オイレンブルクが1860年5月に途中のパリで天津条約交渉にあたったイギリス代表のエルギン伯爵(James Bruce, 8th Earl of Elgin, 1811-1863)とフランス代表のグロ男爵(Jean-Baptiste Louis Gros, 1793-1870)との面会をした。その結果、エルギン伯爵は交渉上の経験を明示しただけでなく、イギリスからの交渉支援の意を伝えた。グロ男爵は同交渉の経験を交流したほか、清国でイギリスに抵抗するための仏露普三国同盟結成の可能性を示唆した<sup>33)</sup>。こうした英仏の異なる態度は、使節団が後の清国交渉に不確定性を与えた。

1860年9月上旬、使節団艦隊が日本に着いたが、外交的交渉は速やかに



行われていた。約三ヶ月の困難な交渉の結果、1861年1月24日、日普修好通商条約が正式に調印された。しかしながら、この条約がすでに結ばれた安政諸条約を見本として起草されたものであり、日本とプロイセンとの両国間のみを対象した条約であるため、オーストリアを除くドイツ諸邦利益を代表して条約特権を「すべてのドイツ人」に施すプロイセンの予定企図は実現しなかった<sup>34)</sup>。一方、使節団に付随した諸専門家たちは日本調査を行い、様々な資料を揃って報告書を作ったほか、幕末期の日本の画像などを残した。また、日普条約締結のため、ドイツ語学科は幕府洋学所に設置され、日本のドイツ学が正式に発足した<sup>35)</sup>。

日普条約締結後の使節団が1861年3月上旬に上海に到着した<sup>36)</sup>。上海在住の西欧人のコミュニティによる勧告と天津駐在の英仏公使の建議を求めた一方、使節団が上海で清国欽差の薛煥（1815-1880）との交渉の結果、使節団が1861年4月22日に上海を出発し天津に向かった<sup>37)</sup>。同29日、使節団が天津大沽沖に停泊した旗艦 Arkona 号の艦上で総理衙門最高責任者の恭親王による交渉許可の書簡を受け取った。その後、一連の交渉の結果、1861年9月2日に清国とプロイセンとの条約が調印された。この条約が天津諸条約をモデルとしたものであるが、プロイセン使節の北京常駐（第二条）が初めて認められたのである。ただし、使節常駐の実行は清国内乱（太平天国運動）の状況によって決めるのであるが、つまり内乱が収まらないのなら、総理衙門の照会で延期する可能性があるとの約束された。ここで、清国が天津諸条約というモデルを多少とも自己に有利な方向へ修正しようとする努力が窺える<sup>38)</sup>。

### 3. 文久遣欧使節と斌椿視察団が見たドイツ・プロイセンの一側面

日本では、安政諸条約締結以降、諸締約国との開港開市における延期交渉のため、江戸幕府は、1862年にヨーロッパに最初の使節団を派遣した<sup>39)</sup>。使節団がドイツに入ったのは1862年7月17日のことであるが、ドイツを

離れてロシアに向かったのは8月5日のことである。7月18日にプロイセンの首都のベルリンに到着し、同21日に国王謁見を行った後で、7月20日、23日、24日、8月3日、4日でプロイセン政府との交渉を行った。8月3日に両国代表は通商条約覚書に署名した。外交的活動のほか、その一ヶ月未満の間、幕府からの使節団がドイツ各界の熱烈な歓迎を受け、ベルリンでの議会や工場の見学のほか、オペラという西洋芸術の鑑賞と、ポツダムでドイツ芸術家との交流を試みた。その中で、ベルリンの慈善医院を訪れた使節団の日本人医師たちは、医院の眼科に長い時間とどまり、現場で目の手術を見学した。とりわけ、同26日に日本人医師たちはベルリンの体育・整形外科研究所、スウェーデン保健体操・整形外科研究所、及び障害者ための施設とシモン薬局を訪問した。当時の独文「医学中央新聞」の報道のとおり、体育・整形外科研究所責任者のペーレント博士は日本人医者たちに対して、すべての医療器具を説明し、治療と手術の方法を石膏模型や写真を見せながら教え、保健体操を実演した。日本人医師たちは、さらにいくつかの顕著な病歴、治療例の説明を受け、博士の執刀する手術に立ち会い、その助手をつとめたなどというのである<sup>40)</sup>。日本人医師がドイツ医学に高い関心を持ったのは、長崎精得館のオランダ人医師ボードウィン（Anthonius Franciscus Bauduin 1820-1885）の医学伝習によるものからである<sup>41)</sup>。ボードウィンの日本人門生は幕末・明治初期に大学東校（後の東京帝国大学）医学教育管理をきっかけにオランダ流やイギリス流の医学のかわりにドイツ医学教育制度を導入することに熱心に取り組んだ。そしてフルベッキ（Guido Verbeck 1830-1898）のドイツ医学の先進性の進言のため、ドイツ医学教育制度が明治初年大学東校によって採択され、1870年頃ドイツ公使に教師派遣の依頼を始めた<sup>42)</sup>。

三年後の1866年3月、清国海関総税務司であったロバート・ハート（Robert Hart 1835-1911）はイギリスに賜暇帰省をきっかけに、同税務司の清朝低級官吏斌椿及び同文館官学生若干名を率い、ヨーロッパ遊歴の案

内をした。斌椿氏一行は、普墮戦争の間に同年7月23日にロシアからベルリンに到着した。着いたばかりの斌椿は、プロイセンの工業現状について「地分東西兩土，共八部。産銅，鐵，絲，布，鐵器最精，工細若金銀造。瓷器尤良，堅致不亞華產。西部産鋼鐵，造炮甲於泰西<sup>43)</sup>。」と感嘆した。到着当日、一行は市内見学を行い、同24日に演劇を鑑賞した。同25日、ベルリン駐在米国公使との応酬のほか、午後王宮を訪れ、プロイセン王妃謁見を行った。同26日にベルリンを発ち、同27日にハノーファーを経由して工業重鎮のケルンに到着した。そこで兵器メーカーを視察し、兵器鑄造を見学した。プロイセン兵器の威力について、「炮子重百斤，形長首尖，內實火藥。敵船包鐵厚七八寸者，子能洞之<sup>44)</sup>。」と描いた。やや五日間のプロイセン訪問は、斌椿氏一行にとって工業發達の深い印象を与えた。

## 二、英字新聞に見た蒲安臣使節団と岩倉使節団

### 1. 蒲安臣使節団—<sup>セッション</sup>ビスマルクとの折衝

はじめに既述したように、ヨーロッパ各地を歴訪した蒲安臣使節団の行程や行事をめぐって継続して報道した英字新聞は、米紙の英字新聞が多数であるが、アメリカ同胞の蒲安臣に関心を示したのは当然のことであると思われる。プロイセンの訪問前に、使節団は1869年9月21日から11月20日にかけて、パリを発ち、ベルギーを経由して北欧のスウェーデン、ノルウェー、デンマーク、及びオランダを訪れた。11月20日にベルリンに到着し、公式的訪問が始まった<sup>45)</sup>。

パリを発った前後、蒲安臣使節団の次の行程を報道したのは、米紙の Boston Daily Advertiser、Milwaukee Daily Sentinel、Morning Republican、Daily National Intelligencer and Washington Express などである。その中で、9月17日付の Boston Daily Advertiser と Milwaukee Daily Sentinel は、使節団の行程を簡潔に報道した<sup>46)</sup>。使節団がフランスを離れて、一日後の同22日付の Daily National Intelligencer and Washington Express と

Morning Republican は使節団の行程やベルリン訪問の予定をやや詳細に報道した<sup>47)</sup>。その後、使節団の北欧歴訪行程の速報は、Daily National Intelligencer and Washington Express と Milwaukee Daily Sentinel である<sup>48)</sup>。

翌日付の The Daily Cleveland Herald、Bangor Daily Whig & Courier、Milwaukee Daily Sentinel などの米紙は、電報記事という形で蒲安臣使節団のベルリン到着をアメリカ人読者に伝えた<sup>49)</sup>。ただし、同 23 日付の米紙 Boston Daily Advertiser は、「Foreign News」に付属した「Prussia」のニュース欄において、「The Chinese Embassy in Berlin」という題目で「BERLIN, Nov. 22,—Mr. Burlingame has arrived here with the Chinese Embassy<sup>50)</sup> .」と丁重に報道した。

上記のように、蒲安臣使節団の北欧訪問やベルリン到着に関する新聞記事がいずれも電報記事であるということが明瞭である。なぜかというと、蒲安臣をめぐる当時の英字新聞が関心を持ったのは、北欧諸国の歴訪ではなく、1868 年 7 月 28 日に調印された蒲安臣条約が清国政府により批准されたかどうかということからである<sup>51)</sup>。1869 年 9 月 1 日付の米紙 The Daily Cleveland Herald はアメリカ政府の憂いを報道した。

「【アメリカ】政府は、進展の状況を説明し、またスワード氏に詳細に通報された蒲安臣氏よりの電報を受け取ったが、蒲安臣のめざましい外交的旅行から帰朝するにいたるまでに、清国政府が批准すること、或は、最後に氏の交渉による諸条約に基づく一切の行動を実行するつもりはなかったということである。合衆国の滞在中、氏が何人かの傑出したアメリカ人発案者や鉄道関係者と清国訪問を約束したが、氏の帰りであれば、条約が批准されるにいたるまでに、彼らの清国での経済活動が無益なものであると氏は彼らに説明したという<sup>52)</sup>。」

しかし、同 18 日付の Boston Daily Advertiser は下記のとおりデマを打

ち消す意を持った記事を掲載した。

「Pall Mall のパリ駐在通信員、合衆国との条約が清国政府により認められなかったと言われた悪意のある電報の後で、蒲安臣がまもなく恭親王より受け取った特電によると、【親王】がたいへん情熱な態度をとってその紳士の奉仕に感謝を申し上げ、そして条約批准が氏の自己の願望に従って帰朝後に行われると述べているということである<sup>53)</sup>。」

そして、同 22 日付の The Hawaiian Gazette は、「The Republican's Washington は、特に、イギリスの電報ニュースが蒲安臣条約の拒否が各国政府にとって信じられないことを発表したと述べている。それは、明白に蒲安臣使節団が代表する新政策に激しく敵対している条約港のイギリス商人の利益にあたっている。上海、香港及びほかの条約港で印刷されたすべての英紙は、計画的にこれを非難している。これまですべての報道は清国や合衆国の反対者における稚拙な捏造であるとみられている<sup>54)</sup>。」という米紙の推測を報道した。10月30日付の The Daily Cleveland Herald は、新しい北京駐在合衆国公使の鏤斐迪 (Frederick Ferdinand Low 1828-1894) を紹介したと同時に、蒲安臣条約が直ちに清国に批准されるというイギリス外交官のトーマス・ウェード (Thomas Francis Wade 1818-1895) の見通しを報道した<sup>55)</sup>。

既述のように、蒲安臣使節団がそうした雰囲気のうちベルリンでの外交活動を始めた。12月1日、使節団一行がプロイセン外務省を訪れたことは米紙の Boston Daily Advertiser と Daily Evening Bulletin によって報道された<sup>56)</sup>。ただし、Boston Daily Advertiser は「Foreign News」の記事欄において、「The Chinese Embassy at Berlin』という題目で報道したが、Daily Evening Bulletin は「Foreign Intelligence」の記事欄において報道した。また報道内容はほぼ一致しているため、Boston Daily Advertiser の

掲載された記事を挙げてみよう<sup>57)</sup>。

12月2日、蒲安臣一行が国王ヴィルヘルム一世に謁見を行った<sup>58)</sup>。国王謁見に関しては、米紙の報道は速報の形式で行った。ただし、その中でいくつかの微妙な異なりがある、まず、The Daily Cleveland HeraldとBangor Daily Whig & Courier はいずれも電報ニュースで掲載した。The Daily Cleveland Herald が報道した内容は「BERLIN, Dec. 3.—Mr. Burlingame had an interview with King William yesterday, and presented his credentials. the Meeting was characterized by the usual complimentary speeches<sup>59)</sup>」Bangor Daily Whig & Courier が報道した内容は「BERLIN, Dec. 3. Mr. Burlingame of the Chinese Embassy had an interview with King William yesterday and presented his credentials. The Meeting was characterized by the usual complimentary speeches<sup>60)</sup>」両紙の報道内容は概ね一致しているにもかかわらず、前者は蒲安臣の個人を突出した叙述であるが、後者は清国使節団の一員としての蒲安臣を報道したのである。「Foreign News」としての速報は、米紙のBoston Daily AdvertiserとDaily Arkansas Gazetteである。Boston Daily Advertiser の報道手法はBangor Daily Whig & Courier と同様であるが<sup>61)</sup>、Daily Arkansas Gazette の報道手法はThe Daily Cleveland Herald と同じである<sup>62)</sup>。

12月4日、使節団一行がプロイセン王室により晩餐会を招待された。米紙のDaily Evening BulletinとMilwaukee Daily Sentinelは電報記事で晩餐会を報道した<sup>63)</sup>。そのほか、同5日付のDaily Arkansas Gazette、同6日付のMorning RepublicanとMilwaukee Daily Sentinelはやや詳細な報道を伝えた。上記三紙は、報道した内容が概ね一致しているが、注目されているのは蒲安臣とビスマルクとの接触ということである。ここで、下記のとおり、Daily Arkansas Gazette の報道が挙げられる。

「清国使節団が、昨日王宮での堂々とした式典において、国王同妃によ

って歓迎された。蒲安臣が挨拶を通じて、プロイセンと合衆国との友好関係を宣言して、プロイセンと【清国】の使節団との協力を約束したビスマルク伯爵の注意を引いた。このレセプションは荘厳なできごとであった<sup>64)</sup>。」

ベルリンでの外交交渉は、蒲安臣とビスマルクが代表するプロイセン外務省との間に行われていた。宮殿晩餐会の招待の前後、蒲安臣条約が批准されるかどうかの新たな情報が欧米諸国やベルリンに伝えきた。12月1日付の米紙Daily Evening Bulletinは、「The Chinese Government and Burlingame」という題名で下記のとおり報道した。

「ニューヨーク、12月1日——清国政府は、蒲安臣条約が拒否されることなく、交渉が進むの中で、ただ延期されることを強く通告している。すべての問題が迅速に処理される際に、ほかの国々との交渉の結果が揃うに至るまでに待つほうがいいと考えられる、とタイムズの北京通信員が報道している。蒲安臣氏に対する朝廷の信頼は揺るぎないことである。さきほど断言したように、使節団全体は不成功とは言えない<sup>65)</sup>。」

12月11日付のNorth American and United States Gazette、同13日付のBangor Daily Whig & CourierとMilwaukee Daily Sentinelは蒲安臣条約批准の記事を速報した。下記のとおり、Bangor Daily Whig & Courierの記事内容が挙げられる<sup>66)</sup>。

「ロンドン、12月10日、蒲安臣氏、清国使節団長は、彼と合衆国と調印された条約が清国政府によって批准されたという情報を受け取った。清国使節団秘書である柏卓安氏が目下カリフォルニアを經由してワシ

ントンに向かっている<sup>67)</sup>。』

同 20 日付の Boston Daily Advertiser は、蒲安臣及び使節団の取った成果を高く評価した清国政府の立場を報道した<sup>68)</sup>。

「ベルリン、12 月 17 日 — 蒲安臣公使は、清国政府が完全に蒲安臣氏を始めとする使節団の活動に満足しているという公式の通知書を受け取った。これはそうした結果をめぐる以前の諸報道を確かめた<sup>69)</sup>。』

1869 年のクリスマス前に、及び 1870 年の新年の前に、北京朝廷による蒲安臣条約批准という情報は蒲安臣と使節団に外交的努力が認められた喜びをもたらしただけでなく、進んでいた清国とプロイセンとの交渉に積極的影響を与えた。1870 年 1 月 4 日、蒲安臣が清国人正使とともにプロイセン外務省を訪問し、そこでビスマルクとの会談を行った<sup>70)</sup>。

同 19 日付の米紙 Boston Daily Advertiser と Milwaukee Daily Sentinel は、交渉の終結と、蒲安臣とビスマルクとの関係についての記事を報道した<sup>71)</sup>。ここで、「Mr. Burlingame's Negotiations」を題名とした Boston Daily Advertiser の報道を挙げる。また、二日後の 21 日付の同紙が双方による公式の書簡交換の発表を速報した<sup>72)</sup>。

「ベルリン、1 月 17 日 — プロイセン政府と清国使節団との間の交渉が今日終了となった。ベルリン、1 月 18 日 — フォン・ビスマルク伯爵と蒲安臣氏との個人的関係は最も親密なかつ友好的性格を持っている。彼らは頻繁に会議を行っているが、清国との条約【に関する討論】は最優先の期間に調整されていくと信じる理由がある<sup>73)</sup>。』

その会談の成果として、1 月中旬頃、プロイセン政府がプロイセン首相



兼外相、北ドイツ連邦宰相のビスマルクの名義で双方による公式の書簡交換の内容を発表した。英紙の The Times は迅速に双方の書簡のイギリス語テキストを掲載した<sup>74)</sup>。

The Times に掲載されたビスマルクによる書簡は、冒頭で「Your Excellency, —I have the honour to acknowledge the receipt of your letter of the 4th inst., referring to our conversations of the same and the preceding day. While bearing witness to the accuracy of your recital of what you said, I willingly comply with your request, by reiterating in substance, and placing upon record what I answered you<sup>75)</sup>.」という双方の会談を回顧し、プロイセン政府によるいくつかの見解や立場をはっきり述べる姿勢をとった。

下記のように、ビスマルク書簡の内容を挙げてみよう。まず、清国使節団及び清国に対して、清国主権尊重を前提とするプロイセン政府の公式の一般的立場を表明した。

「清国政府からこの国への初めての外交的コミュニケーションを受け取ったのは、わたくしにとって大変喜ばしいことに思う。そして万国公法に従って築き上げた交渉が両国に対して平等な利益をもたらすと信じている。ここで貴方が受け入れた招待、そして貴方やほかの使節団員がわたくしに伝えたのは、熱情な承認として、清国へのドイツ国民の同情を保証し、また両国間の最も友好関係を育むと望んでいる。さらに喜んで言い添えたいのは、北ドイツ連邦とその国王殿下、わたくしの慈悲深い君主、両方とも国家元首は、一般的な傾向に同意する政策を観察することをやめるつもりはない。我々両国の交渉において、ドイツの利益は、清国の繁栄に対して貢献すること、また不可欠なこととして役立っていると確信している。即ち、【清国の】中央政府は、治下の領土と国民全体において、尊厳、権威、そして帝国に相応しい

支配力を享受している<sup>76)</sup>。』

続いて、蒲安臣条約に合意されたように、条約遵守、清国での外国人状況の改善、及びドイツ人の保護など要求が出された。

「全国における秩序の維持、また人身や財産の安全ということに対して、政府は帝国臣民に対して公正なかつ平等の処遇を与え、さらに清国に進出しているわが国民に対して最も有効なかつ普遍的保護の保証を提供し、条約の履行を確保することと、苦情を是正することを果たすことは最善の方法である<sup>77)</sup>。』

さらに、国際社会との交流による国家発展の道を推奨する説得を行った。

「国内紛争や国際衝突のない時、政府が予想したように国の広大な資源の発展に全力を注ぐべきである。国内の産業と海外の通商は同時に促進させる。そして、絶え間なく成長している繁栄は、疑いなく、国の防衛を強化しており、清国と外国との友好関係を相互に信頼し、また活発な交流の政策を追求する政府の決意を鼓舞している<sup>78)</sup>。』

最後に、ビスマルクがプロイセン政府を代表し、「こうした想定のもと、北ドイツ連邦は貴国の急務に介入する姿勢をとろうとする<sup>79)</sup>。」という清国とのより積極的な関係を展開しようとする意志を表明した。

一方、18日付の蒲安臣書簡が同22日付の同紙に掲載された。蒲安臣書簡がビスマルクのものより長いので、その中の要点をまとめる。まず、清国との条約に対する各国の見解について、「相当に様々な見解がある。一つでは、条約【体制】が武力によるものということで、その支持をもって引き続き圧力をあたえなければならないが、その体制を緩和すれば、命に係

わり、損すると堅持している。もう一つは、その体制が思慮深いものではなく、安全なものでもない。短時間の間に役に立っているが、最後にその体制創立者の利益を破壊する恐れがあるはずであるという観点を持っている<sup>80)</sup>。」と、蒲安臣は指摘していた。

続いて、蒲安臣条約の積極的一面を述べ、ビスマルクが清国との緩和政策を選んだことを肯定した。「私が閣下のお考えを気付かせ、使節団が歴訪した諸締約国の立場に賛成する行為を推奨した、これは喜ばしいことである。合衆国は締約国であるが、清国所管に対する広範な管轄権を認めているが、またカリフォルニアにいる清国人に十分な保護を提供している<sup>81)</sup>。」

それと同時に、使節団の努力により歴訪した各国における対清協力政策の変化について、「使節団へのフランス皇帝の熱情なもてなし、また当時彼が同様な見解を発表しただけでなく、後に彼の大臣も同感して同じ声明を出したが、そして喜ばしい反応としては、オランダ、デンマーク、スウェーデンの諸君主が大清大皇帝に直接に書簡を送った、それらは、清国に対する友好的かつ思いやりのある行動を望む保証である<sup>82)</sup>。」

さらに、感謝の意をこめて下記のとおり述べた。「閣下に対して保証する、清国政府は必ず西洋各国の寛大な精神を高く評価するであろう。確かに、その民族、後退の状態において敵によって非難されている民族は外国に対して大きな譲歩をしたのであると我々が分かっている<sup>83)</sup>。」

上記の書簡交換後、ベルリンでの蒲安臣の外交活動がきりをつけた。同28日、使節団一行は宮殿で国王に別れを告げ、同31日にベルリンを立ってロシアに向かった<sup>84)</sup>。

## 2. 岩倉使節団 — ビスマルク詣、キリスト教との対話

主としてイギリスの The Times は、パリを立った岩倉使節団の次の訪問先を相次いで短く報じた<sup>85)</sup>。オランダでの公務を終えた岩倉使節団一行が1873年3月7日、オランダのデン・ハーグを離れ、同9日にドイツ西部の

エッセンを經由してベルリンに到着した<sup>86)</sup>。ベルリンに着いた当日、The Times の電報記事によって、フランスとオランダが条約改正を正式的に拒否したことが発表された<sup>87)</sup>。

一ヶ月未満のベルリン訪問において、使節団一行が参加した公式行事は、同 11 日のドイツ皇帝ヴィルヘルム一世への謁見、同 12 日のドイツ帝国議会（Reichstag）の開会式及び晩餐会、同 23 日皇帝の誕生祝賀会である。そのほか、ベルリンでの諸機関・施設の見学を行った。

同 12 日付の The Times は、速報で「ベルリン、3 月 11 日、使節団が盛大なセレモニーに馬車で帝国宮殿に赴いたが、そこで皇帝を始め、一同列席したビスマルク侯爵<sup>88)</sup>及び朝廷の高官たちによって歓迎された<sup>89)</sup>。」と、使節団のドイツ皇帝謁見を報道した<sup>90)</sup>。当日の歓迎式は非常に大規模であったが、使節団は四頭立て、六頭立ての馬車で送られたが、副使の木戸は「今日のような美しい馬車をいづこの国においても見たことはなかった」と感嘆した<sup>91)</sup>。謁見は、1862 年に初めてプロイセンを訪れた竹内使節団が謁見した場所であった「白ノ間」で行われたが、挨拶はドイツ語と日本語で行われた。日本語通訳者は青木周蔵（1844-1911）で、当時ベルリンに留学中であり、後の駐独大使と外務大臣になった人物である。皇帝謁見の後、ドイツ皇后が女官とともに、別途の歓迎会にて使節団と会見した<sup>92)</sup>。

同 12 日に開かれたドイツ帝国議会の開会式に列席した岩倉使節団について、英紙の The Times は、「Opening of the German Parliament」という題目で、ドイツ皇帝ヴィルヘルム一世がドイツとフランスとの平和、及び予算案の解決などの議会で議論したことを詳しく報じたほか、列席した各国外交代表に言及した際、「…外交官の傍聴席においても、殆ど各国からの外交代表が列席していたが、ヨーロッパのドレスを着ていた日本使節団を含んでいた<sup>93)</sup>。」と、岩倉使節団の出席を報道した。開会式当日の公式記録では、傍聴席の一つは外交団用にあてられ、他は日本使節団によって占められていた。夜には、使節団は宮殿に招かれ、皇帝招待による晩餐会が行

われ、そこには王族を始め文武官百三十名が同席した<sup>94)</sup>。

同 15 日、ビスマルクは使節団一行の上層部の者たちを公邸において晩餐会に招待した<sup>95)</sup>。この晩餐会は翌日の独字新聞 Vossische Zeitung によって詳しく報じられた<sup>96)</sup>。その晩餐会では、ビスマルクは、自分の経験や見識から世界大勢への指摘を日本使節団に示した。即ち、世界のあらゆる国家がお互いを礼節をもって交わっているというのは虚構である。現実には、強国の政府が弱小国を圧迫している。彼ビスマルクが幼少のころ、プロイセンは弱小にして、自分はそうした状態を変えようと常に願ってきた。万国公法は諸国家間の秩序維持を目的としているが、強国が他国と紛争を生じたならば、強国は自国の目的に適合するかぎり、それに従って行為するのであり、さもない場合には自らの力を用いるであろう。弱小国は常に不利な立場に立たされているのである。このことはプロイセンに該当するところであったが、プロイセンは国民の愛国主義の助けによってそうした事態を変えることができた。今日、諸外国は最近の諸戦争のゆえにプロイセンを憎悪しているが、プロイセンは自国を守るためにのみ戦ったのである。イギリスやフランスは自国の植民地帝国を拡大しつつあるので、これらの諸国が礼儀正しく立ち現われようとも、信用することはできない。日本はプロイセンがつい最近までそうであったような状況におかれているがゆえに、プロイセンと日本はお互いに誠意ある接触を保つべきである、とビスマルクが論じた<sup>97)</sup>。

同 16 日、使節団が兵器廠に案内された。そして同 18 日、使節団はベルリン南部の二つの近代的軍事施設、午前中にフランツ兵営、午後にはベラリアンス街にある騎兵屯営を見学した<sup>98)</sup>。これらはいずれも地元の独字新聞によって報じられたのである。

同月 19 日、福音主義教会連盟 (Evangelische Kirche) ドイツ支部の代表メンバーがフォン・エグロフシュタイン伯爵とプロイセン宮廷説教師 Dr. ホフマンによって率いられて、ベルリンで使節団を訪問し、日本における

福音と宗教の自由について使節団と交流を行った。使節団派遣の準備において大いに貢献したアメリカ人宣教師のフルベッキは、日本におけるキリスト教解禁を考える必要を提起してきた。そのため、使節団はこうした問題について十分用意していた。それは福音主義教会連盟による宗教的自由の念願に対する応答のための文である。そこには大使岩倉と四名の副使の署名がされ、ドイツと西洋を称賛し、宗教的自由という原理に関して西洋の良き経験を考慮していきたいという姿勢を示し、福音主義教会連盟の要請を受け入れる旨が記されていた。同月25日付の独字新聞Neue Preußische Zeitungは、キリスト教を解禁している日本政府の決定を報道した1873年2月25日付の仏字新聞の記事を転載した<sup>99)</sup>。

上記の岩倉使節団と福音主義連盟との交流に対する日本国内の反応に関して、5月31日付の米紙Daily Evening Bulletinは、「Christianity in Japan」という題目で日本人読者の投稿を掲載した。文章の冒頭で、「数週間前に、電報でヨーロッパからの通信が届いた。そこには、日本国内において、キリスト教が認められた帝国の宗教として採択されたことをめぐる、日本使節団とドイツ大学教授との交流が報じられた。多数の【欧文】新聞紙はそこで当日の報道を通じて、すでにその討論が日本における教育を受けた階級層の関心を盛り上げたと暗示している。The Japanese Gazetteは、国内紙のミナト新聞に掲載された読者投稿の便りの英訳文を「キリスト教」という表題をつけ、発表した<sup>100)</sup>。」

一方、米紙のThe Hawaiian Gazetteは3月26日に自社の横浜駐在通信員による日本の進歩における状況に関する論説を掲載した。文章の冒頭で「世界史においても最も最近にいたるまで、西洋からの文明の春風が日本の先進の頭脳に吹き込んだが、日本行事に対して楽観的に捉える外国人たちに期待された活動力があり、かつ日新しい影響を呈している。この国は、今拡大された国際関係という成長している影響のもとで、世界との関係を公平に維持している<sup>101)</sup>。」と、絶賛した。とりわけ、明治初期の対外親善

の印として最高層の姿勢について「日本における進歩の一つの重要な兆しは、より頻繁に宮殿で行われた天皇皇后両陛下と諸外国公使、及びほかの【西洋からの】来訪者との会見である。最近の10日に、デロング女史とビュチョフ女史は、デロング氏、アメリカ公使、そしてビュチョフ氏、ロシアの臨時代理公使とともに、東京（江戸）において天皇皇后両陛下に謁見を行った。両陛下とのお祝いの言葉が交換され、天皇陛下は、日本使節団がアメリカ国民に熱烈に歓迎されたことに関心を寄せた<sup>102)</sup>。」

公式行事のほか、使節団における毎日記録された訪問先は、造幣局、電信局、刑務所、消防本部、博物館、ないしポツダムの宮殿である<sup>103)</sup>。同26日、使節団一行はベルリンを発つ前に、日普修好通商条約のプロイセン側の調印者であったオイレンブルク伯爵によって招待された<sup>104)</sup>。以上の見学や視察、款待会などが当時地元の独字新聞によって報じられたのである。同29日、使節団一行がドイツ側の役人と日本人留学生に歓送を受け、ベルリンからロシアに向かった<sup>105)</sup>。

### 三、一八七〇年以後の英字新聞に見た独清日関係 — 英紙の The Times をめぐって

一八七〇年前後の世界大勢では、イギリスは世界的規模の自由貿易体制を樹立し、インドをイギリスの中心的地位を維持し、貿易、入植、投資、そして文化の普及という諸手段を通じて世界的規模の植民地帝国を形成した。イギリスは、国際貿易体制を左右していたと同時に、政治的に各植民地において「代議政府」、「責任政府」或は「直轄植民地政府」という様々な支配様式で統治していた。その上、主として伝道協会トウチの役割を利用して植民地だけでなく、世界各国にイギリス文化の普及と拡散に取り組んだのは、イギリスの全球戦略の一環である<sup>106)</sup>。蒲安臣使節団や岩倉使節団が見たイギリスはそのように構成された世界的帝国である。

一方、一八六〇年代、つまり蒲安臣使節団が訪れたプロイセンは、ドイ

ツ統一を最重要政治課題としており、東アジア問題への関心の程度は低く、基本的には列強との共同歩調の方針をとっていた。そして、一八七〇年の普仏戦争勃発により、東アジア問題はプロイセン・ドイツ外交においては後背に退いた。ドイツ帝国成立以降も、ビスマルクは主に対英関係から東アジア問題に対応し、イギリスの介入を招く可能性があるとして慎重な姿勢を示し、一八八〇年後半まで外交的かつ経済的にイギリスへの依存と協調を前提に、ドイツの東アジア政策を展開してきた<sup>107)</sup>。他方、ビスマルクは、ドイツ帝国安全をめぐる保障政策のため、最初に植民政策に反対する立場を示したのである<sup>108)</sup>。なぜならば、政治家かつ外交家としてのビスマルクによる政策は、非ヨーロッパ世界との関係が弱まるのを覚悟するうえで、ヨーロッパ内の変革の回避を目的としたからである。即ち、帝国成立以降、ビスマルクによるフランスへの戦争の脅かしから魅惑的提案に至るまで様々な戦術は、ヨーロッパ大陸においてドイツが獲得した地位を固定化するために役立ち続けた<sup>109)</sup>。岩倉使節団が訪れたドイツはそのような帝国である。

両使節団のプロイセン・ドイツ訪問は、一八七〇年以後の独清・独日の接触に対して広範な協力への契機を作り出した。後にそうした接触は世界的植民帝国を運営していたイギリスの関心を引き、英字新聞にも取り上げられた。

1876年8月7日付のThe Timesは清国海沿岸で活動していた海賊に対する合同行動を規定した独清協定を掲載した<sup>110)</sup>。1877年12月5日付の同紙は、下記のとおり、新しいドイツ駐在清国公使<sup>111)</sup>がドイツ皇帝に謁見したことを報道した。

「ベルリンにおける清国公使——先月の26日、ベルリンにおける清国公使、劉錫鴻閣下は、ドイツ朝廷に派遣された公使の信任状を捧呈するため、ベルリンの皇居において、ドイツ皇帝に謁見を行った。皇帝



陛下に挨拶した際に、公使は、清国とドイツの間に既に存在している、長期にわたる友好関係を激賞していたが、皇帝からの返答として、清国のドイツに対する親密な感情を抱き、それと同時に、新しく認められた公使のベルリン到着に歓迎の意を表しているとおおせられた。——ロンドンと中国電報<sup>112)</sup>。』

1883年9月11付のThe Timesは、読者のジョセフ・サミュエル氏による清国におけるドイツの影響力に関する記事を掲載した。サミュエル氏の文章は、一八七〇年代から一八八〇年代早期にかけて清国において、成長したドイツの影響力を描いた一方、イギリス系商業教育を受けた中国人コンプラドールの清国民族意識をも論じていた。ここで、清国でのドイツの影響力に関する部分を下記のとおり挙げる。

「…私は以前に天津に居住していたが、そこでドイツ人教官による【清国の】軍隊の訓練や演習などを見る機会を得た。彼らは【直隸】総督に雇われ、相当の年俸を支給され、絶対には言えないが、少なくとも、清国軍隊への軍需物資輸出を扱うドイツ側の業界に影響力を持っている。もし外交的、或は領事的援助が必要であるなら、ドイツ人は、ただ要請し、彼らに中国の地方や経済界で支配的地位を獲得させる公式証明書さえ示せばいい<sup>113)</sup>。…」

続いて、天津駐在の清国陸軍や海軍におけるお雇いフランス人教官とドイツ人教官との待遇差別、及び彼らに対する清国政府の態度などが論じられたが、フランス人教官の苦境が描かれた。

「…ドイツ人教官が毎日増えていてその活動力や影響力が成長しているにつれて、フランス人教官にとって、清国海軍において雇われる機会

が見つかっていない。その結果、総督は、最も礼儀正しいマナーで、フランス人教官との和解を達成し、雇われたフランス人教官団にあらゆる給料を払った。彼らは次の便の汽船に搭乗しヨーロッパに戻った<sup>114)</sup>。…」

さらに、清国で奉仕したドイツ人教官の存在やドイツ軍事訓練による清国軍隊の新たな容姿が描かれた。

「…天津の住所録を通じて、普仏戦争で名声を博した、また疑いなく清国の需要に従う、あるドイツ人教官の氏名が分かった。私の個人的観察から見れば、野戦砲兵の実力がどうであるかと断言できない。ただし、優秀であると聞いたことがある。そして、訓練中や通りでの彼らを見たことがある。武器が良い状態を保たれてきれいであり、兵士が元気で整然とした様子であり、強い蒙古八旗部隊が砲兵部隊に配属され、砲車がどの作戦に対しても堅固である<sup>115)</sup>。…」

上記の文章は清仏戦争（1884年）勃発の前に書かれたものであるが、清国軍事改革におけるドイツとフランスによる勢力の競争の一側面が窺える。作者のサミュエル氏の立場は明白にフランス側に接近し、清国におけるフランス勢力の没落に対し、同情を表した。なぜならば、イギリスやフランスは、普仏戦争で勝利したドイツがヨーロッパ大陸において勢力拡大を求めていたことを警戒していたからである。一方、清国は、ベトナムをめぐるフランスとの関係が悪化していく中で、ドイツ人退役将校の招聘を行い、ドイツが清国を支援している印象を与え、フランスを牽制しようとする思惑が存在していた<sup>116)</sup>。

一八八〇年代以降、イギリスとドイツとの世界競争は清国の軍事近代化にも波及した。ドイツは軍事教官や顧問を通じて、清国の軍事近代化への

影響力を獲得し、清国への軍需物資などのドイツ商品輸出の促進を期待し、李鴻章（1823-1901）を始めとする清国軍事改革首脳の協力を働きかけた<sup>117)</sup>。清仏戦争が終わると、ドイツによる清国経済進出は本格化していった。これは同時に清国をめぐる帝国主義列強間の競争の開始を意味している<sup>118)</sup>。

既述のような独清関係の一側面に対して、独日関係が The Times によってどのように描かれたかということに関しては、1887年5月14日付の The Times の論説である「England, Germany, and Japan」から窺える。それは東京で開かれた条約改正会議における英紙の論説であり、一八八〇年代以降における独日接近に対する英紙の立場を示したものであるとみられるであろう。文章の冒頭で、条約改正交渉の難航が提起され、当時の日本人が大きな関心を持っていたことが言及された。即ち、東京駐在ドイツ公使によるドイツの影響力と支持の増加、及び女性の地位を向上させる運動などは The Times の日本駐在通信員の関心を引いていた。とりわけ、若干のドイツ人専門家がお雇い外国人として日本に奉仕したことは、特別に注目された。続いて、それをめぐって The Times 駐日通信員の観点交換を通じて、日本によるドイツへの傾斜は、ドイツ立憲主義的原理を見本として1890年に発足した日本立憲体制に導入され、ロジックな結果であると述べられた<sup>119)</sup>。

次のように、その結果を引き起こした原因を述べた。

「…1882年、グレートブリテンが率先して日本からの条約改正要請を拒否した。…ベルリンにある内閣はドイツの貿易と入植を拡大する大規模な事業に対して積極的に関心を向け始めた。その結果、伊藤【博文】伯爵、今の日本の首席大臣が、その重大な時点にヨーロッパを訪問したが、数ヶ月を通してドイツの首都に滞在し、ドイツ帝国の立法と行政のシステムを見学していた。氏のベルリン滞在にあたり、自然

にビスマルクとの親しい関係ができたが、後者がその時に日本の現状や将来への見通しを含む詳しい情報を入手したことは筋の通ったように結論づけられた。その偉大な宰相は、先見の明ある政治家として、既存条約体制から脱出していきたいという極めて強い要望を表した日本の機会を見落とすわけにかいかない、と見られている。…ビスマルク侯爵は、同時に、疑いなく、そういう困難から日本を救うべく西洋列強を含むすべての競争相手を遠ざけるチャンスを意識してる。イギリスは、その機会を相当に無視している<sup>120)</sup>…」

続いて、作者は、オリエントにおけるイギリスの巨大な影響力に言及し、イギリスとドイツとの間における日本側の曖昧な立場を批判し、これまでイギリスとの交渉において日本側がとった利害を説得した<sup>121)</sup>。

さらに、作者は日本が受け入れたドイツのことを分析し、特に在日のドイツ商人の姿勢を描き、お雇いドイツ人専門家の才能を称賛した。「ドイツ商人は、礼儀正しく空気をよむ日本人客との交渉において相当な程度の友好的かつ礼儀正しい態度をとっている。彼らは、好きなやり方で日本人同業者との交際をしており、その国の言葉を学んだ、取引において日本人側の協力を求めている。そして、政府により雇われたドイツ人は、よく選ばれた優秀な人材であり、それぞれの領域において腕が立ち、日本人に奉仕することにおいて熱意や忠誠をもっている<sup>122)</sup>。」

以上のように、作者は、日本におけるドイツ影響力の成長と日本によるドイツの受容について、「all the recent outeries about a German colony, about German aggressiveness, and Japanese fickleness」と、結論を出した。また、「For the last 10 years treaty revision has been the question most near to the hearts of the Japanese. More than once England had the opportunity of solving that problem, to her own as well as Japan's great advantage. More than once she neglected it. Germany, more complaisant,

then stepped in as a friend, and is now making the best of her initiative<sup>123)</sup>.」]

上記文章が掲載された時が、イギリスとドイツの世界競争が始まった一八八〇年代後半であるため、十九世紀後半の日本における独英競争の一側面が明らかにした。そのほか、言い添えたのは、ドイツ立憲制度への日本の関心が1882年の伊藤のドイツ訪問から始まったのではなく、岩倉使節団の副使である木戸孝允のベルリン滞在中から開始されたことである。木戸は使節団のロンドン滞在中に、ベルリン大学法学部に在籍した日本人留学生の青木周蔵から欧米諸国の憲法の概要について説明を受け、特に青木にプロイセン欽定憲法の翻訳を依頼し、ベルリンでプロイセン欽定憲法の調査を青木と約束した。ベルリン滞在中、4月23日に、木戸は青木の案内でベルリン大学法学部のドイツ国法・行政法担当教授のフォン・グナイスト（Heinrich Rudolf H.F. von Gneist 1816-1895）を訪問した。その時、青木は外務省一等書記官任官としての法学部生であり、フォン・グナイストに師事していた。この会談の後、木戸は私擬憲法の起草を決意した青木の援助を依頼した。青木は、フォン・グナイストの影響のもとで、私擬憲法の起草に着手した。後のドイツ公使となった青木は、1882年に憲法調査のために渡欧した伊藤博文のために、フォン・グナイストの特別講義を依頼し、通訳を引き受けた<sup>124)</sup>。

## おわりに

清日の両使節団は、既述の英字新聞のとおり、プロイセン・ドイツ訪問を通じて、両使節団の派遣目的を達成した。つまり、清国側はプロイセンから、近代化の洋務運動のための主権尊重と協力の受諾を得た。その受諾を受けた後の一ヶ月未満、蒲安臣はセント・ペテルブルクでの交渉において肺炎により急死した。したがって、プロイセンからの受諾はある程度で蒲安臣氏の最後の外交的成果、或は政治的遺産と言っても過言ではない。

1870年2月8日付の米紙Daily Arkansas Gazetteは、これまでの氏の外交的折衝をめぐる使節団参事官の柏卓安氏の評価を掲載した。

「清国使節団の柏卓安はセント・ペテルブルクでの蒲安臣と合流しようとするが、使節団がロシアとの交渉を終えるに至るまで、そこでとどまる予定である。その後ブリュッセル、つまりベルギーに向かう。柏卓安氏は、彼が蒲安臣氏とビスマルク伯爵との間の通信と、すでに米英仏によって採用された政策がプロイセンに認められたことを立証したと言っている。寛容と熟慮の政策が清国へ向かっている<sup>125)</sup>。」

日本側は、ドイツ訪問を通じて近代国際社会への積極的姿勢を示した一方で、プロイセン・ドイツの後進強国の国力を自ら経験した。とりわけ、ビスマルクによる演説は日本使節団に「軍国プロイセン」という相当の印象を与え、日本の自らの道への思考を促したが<sup>126)</sup>、工商産業と国家権力との緊密な相互依存関係を特徴とするドイツの国家産業の独自性は使節団にとって啓発となった<sup>127)</sup>。そして、使節団一行に同行した留学生のうち、少なくとも十名ほどのドイツ留学生がいた。使節団帰朝後、ドイツ帝国に関する様々な情報がすでにドイツ在住の日本人留学生<sup>128)</sup>を通じて日本に伝えられていたため、旧公卿や華族等出身の有志者が相次いで渡独したが、例えば後に木戸孝允の嫡子正二郎、大久保利通の三男利武などがドイツへ赴いた<sup>129)</sup>。1881年、いわゆる「明治十四年政変」以降、ドイツ帝国憲法をモデルに擁護した派閥の勝利をきっかけに、ドイツへの傾斜は本格化になっていった。

蒲安臣使節団が訪れた時点では、プロイセンが崛起していたころであるが、岩倉使節団が訪れた時点では、統一されたドイツが後発強国の最高潮期の開始である。したがって、英字新聞に見た独清・独日関係はそれぞれの時代によって異なる報道が出た。即ち、両使節団のプロイセン・ドイツ

訪問に関する英字新聞の報道は、客観的であるが、一八八〇年代以降における報道は、ドイツの世界競争による独清日関係に対して、警戒の意識をもったものである。その中で、ドイツとの直接的な対抗をとる必要があるため、米紙よりも、英紙のほうが警戒心が強く、相当の指摘が見られた。換言すれば、一八七〇年前後の独清日交渉に関する英字新聞報道は、記事やニュースというものであるが、一八八〇年代より東アジアにおける英独世界競争の一側面を読み取る史料と見なしてもよい。

### 注

- 1) プロイセン (Preußen 1701-1918) は、中世以降神聖ローマ帝国における主権のある強権邦国である。十九世紀後半さらに勢力を増し、1867年に北ドイツ連邦の盟主となった。1871年に、普仏戦争を通して、フランスを撃破し、ドイツ全域を統一したことによって、ドイツ帝国を成立させた。第一次世界大戦後、ドイツのヴェイマル共和国の一邦となった。第二次世界大戦後、連合国管理理事会法令四十七号により、1947年2月に解体された。
- 2) プロイセンへの正式の訪問の前に、1869年9月21日、蒲安臣使節団一行が汽車でフランスを離れ、ベルギーを横断してスウェーデンに向かった。同22日にプロイセン国境に入った。ハノーファーで馬車に乗り換えて自由ハンザ都市ハンブルク (Freie und Hansestadt Hamburg) に着いた。同24日にハンブルクからデンマークに向かった。志剛『初使泰西記』(湖南人民出版社、1981年) 77-78頁。
- 3) 普墺戦争 (Deutsch-Deutscher Krieg 1866年6月14日-8月23日) の後、勝利したプロイセンは、オーストリアが主導したドイツ連邦を解体し、ドイツ関税同盟 (Deutscher Zollverein) によって結ばれた北ドイツ諸邦と合意し、1867年4月26日にプロイセンを主体とする二十二ヵ領邦を含む北ドイツ連邦 (独: Norddeutscher Bund、英: North German Confederation) を成立させた。連邦は国家ではなく、参加した諸邦や自由都市による国家連合体である。しかし、プロイセン国王のヴィルヘルム四世 (1797-1888、北ドイツ連邦主席在任: 1867年7月-1871年1月、初代ドイツ帝国皇帝としてのヴィルヘルム一世在位: 1871年1月-1888年3月) は連邦主席として連邦を代表し、外交の諸権利や武装力量の指揮権を握った。プロイセン首相のビスマルク (Otto von Bismarck 1815-1898) は連邦宰相として連邦参議院議長を兼任した。蒲安臣使節団がベルリンに着いたのは、上

述したとおりの状況である。

- 4) 田中彰『岩倉使節団の歴史的研究』（岩波書店、2002年）325-326頁。
- 5) C. Y. Hsü 著、屈文生訳『中国進入国際大家族 1858-1880年間の外交』（商務印書館、2018年）256頁。
- 6) 近世の「ドイツ」とは、政治的意味ではなく、地理的意味しかない。その時、いわゆる神聖ローマ帝国（独：Heiliges Römisches Reich、ラテン語：Sacrum Romanum Imperium、1806年8月6日にナポリオンからの圧力により解体された）と呼ばれた、ゆるやかな連合体という各地の領邦国家が分立していたが、統一国家としてのドイツの民族意識は殆ど形成していなかった。
- 7) 中国の明朝中葉以降、イエズス会士の有志者が天主の福音を東アジア世界に伝播することを目指し、当時東アジアの重要な国々であった中国や日本に相次いで渡来したのである。イタリア出身の神父であったマテオ・リッチ（中国名：利瑪竇 1552-1610）のとおり、多数のイエズス会士たちが明朝政府の入国許可を受け、中国の広大な地域を遊歴し、中国の儒家知識人との親交を結んだ。これによってルネサンス以降のヨーロッパの天文学・地理学の諸成果は、中国儒家知識人の世界認識を喚起し、萌芽期の中西文化交渉に促したのである。岡本さえ『イエズス会と中国知識人』（山川出版、2008年）19-22頁。他方、利瑪竇による『山海輿地全図』及び『坤輿万国全図』において、ドイツという地方は最初にヨーロッパ洲に属し、「入爾馬尼亞」という漢字で標示された。後にイタリア人のイエズス会士艾儒略（Giulio Aleni 1582-1649）による『職方外記』において、ドイツという地方が『亜勒瑪尼亞』という漢字で表示されたほか、ドイツ地方の地理、習俗ないし神聖ローマ帝国の選帝侯制度までも紹介された。清代康熙時代、オランダ人のイエズス会士の南懷仁（Ferdinand Verbiest 1623-1688）による『坤輿全図』においてドイツ地方は「熱爾瑪泥亞」という漢字で標示された。既述のように、ドイツという地方の翻訳について、明朝から清朝早期にかけてそれぞれの漢訳が現れ、中国儒家知識人にはドイツというヨーロッパの一国の印象が与えられた。Vgl. Yongfu Han: *Kenntnisse der Chinesen von Deutschland in den 1840er Jahren*, In: Mechthild Leutner, Andreas Steen, Xu Kai, Xu Jian, Jürgen Kloosterhuis, Hu Wangli, Hu Zhongliang (Hg.) (2014): *Preußen, Deutschland und China Entwicklungslinien und Akteure (1842-1911)*, Münster, S.1-3.
- 8) 湯若望の教養と学識に関しては、現存の資料から見れば、氏が幼年に故郷のケルンのイエズス会が開設した初等学校に通じ、後に従兄弟とともにイエズス会系の高等学校に進学した。初等・高等学校を通じて、氏がルネサンス以降の近世的人文・自然科学の基礎知識を身につけた。それと同時に、氏が信者としてカトリック



- 教会に強い信仰心を持ち、イエズス会士として海外伝教の決心をかためた。それゆえ、成年後の氏がイエズス会士になることを目指し、カトリック教会の都であるローマに赴き、地元のドイツ大学予科 (Collegium Germanicum) に入り、海外伝教のためにより専門的学問の研究に取り組んだ。Vgl. Vāth. ALFONS unter Mitwirkung von Louis van Hee (1991): *Johann Adam Schall von Bell S.J.: Missionar in China, Kaiserlicher Astronom und Ratgeber am Hofe von Peking, 1592-1666: Ein Lebens- und Zeitbild, Neue Aufl. mit Nachtrag und Index*, Nettetal, S.11-17.
- 9) Xiaoyuan, Jiang, *Johann Adam Schall von Bell and Ptolemaic Astronomy in China: Aspects of the Western New Calendar (Xiyang xinfa lishu, 1645)*, In: Roman Malek, ed., *Western Learning and Christianity in China: the Contribution and Impact of Johann Adam Schall von Bell, S.J. (1592-1666)*, vol.2 (Nettetal: Steyler, 1998) pp.497-504.
- 10) Xi Sun, *Johann Adam Schall von Bell und die westlichen "Feuerwaffen" in China*, In: Roman Malek, ed., *Western Learning and Christianity in China: the Contribution and Impact of Johann Adam Schall von Bell, S.J. (1592-1666)*, vol.2, (Nettetal: Steyler, 1998) pp.691-698.
- 11) 岡本さえ、前掲書、33-37頁。
- 12) オランダ東インド会社は、正式な名称としては連合東インド会社、オランダ語で Vereenigde Oostindische Compagnie、英語で United East Indian Company を指す。1602年に世界初の株式会社という形で設立された。本社はオランダのアムステルダムである。会社はアジアで商業活動に従事してだけでなく、オランダ政府によって条約の締結権、軍隊の交戦権、植民地の経営権などという喜望峰以東における諸特権を与えられていた。1609年に日本の平戸で支店としてのオランダ商館が開かれた。1619年に会社の第四代東インド総督ヤン・ピーテルスゾーン・クーン (Jan Pieterszoon Coen 1587-1629) がジャワ島でバタヴィア城を築いて会社のアジアにおける本拠を設置し、アジア地域の商業・政治・軍事面活動に専念した。これによって、オランダが十七世紀から十八世紀中葉にかけて世界で最も強大な海上大帝國を築いた。1799年に会社は英蘭競争の敗北及び自らの財政危機でオランダ政府によって解散された。羽田正『東インド会社とアジアの海』(講談社、2007年) 82-86頁、138-141頁、328-330頁。
- 13) Vgl. Veit Hammer, Timon Screech: *Die Preußische Kenntnis von Ostasien im 17. und 18. Jahrhundert*, In: Sebastian Dobson, Sven Saaler (Hg.) (2012) : *Unter den Augen des Preußen-Adlers, Lithographien, Zeichnungen und Photographien der Teilnehmer der Eulenburg-Expedition in Japan, 1860-61*, München, S.67-69.

- 14) カール・ギュツラフは、1803年7月8日に東プロイセン（Ostpreußen）のシュチェチンに生まれた。少年時代は貧乏な家庭で手工業の学徒に従事した。十八歳の時にベルリンの神学院に入り、1823年に卒業した。その後、オランダの神学院で引き続き修業した。1826年に牧師按手を受け、オランダ伝道協会（NZG）の宣教師としてインドネシアのバタヴィアに派遣された。そこで宣教活動のかたわら、中国語を学んだ。1828年にオランダ伝道協会から退会した後で、1831年から1833年にかけて三回にわたって中国海岸の各地を訪れ、宣教書物を配ったほか、地理調査を行った。後にこの三回の旅行調査を『Journal of Three Voyages』として上梓した。広州での宣教活動では、多くのイギリスやアメリカからの宣教師との親交を結び、モリソン訳聖書の改訂に寄与した。一方、ギュツラフはイギリス東インド会社の通訳を務め、清英江寧条約の談判においてイギリス側の通訳として条約成立に尽力した。戦争後、香港に移住し、そこで中国人宣教師の養成のための「Chinese Union」を創立した。1851年に香港で没した。Vgl. Herman Schlyter (1946): *Karl Gützlaff als Missionar in China*, lund, S.8-32, S.33-62, S.144-157.
- 15) Vgl. Yongfu Han, *a.a.O.*, S.3-11.
- 16) 江戸時代早期から中期にかけて、多くのドイツ人がオランダ東インド会社の雇用を通じて日本に渡った。詳細な考察は Josef Kreiner: *Deutschland-Japan. Die frühen Jahrhunderte*, In: Josef Kreiner (Hg.) (1984): *Deutschland-Japan Historische Kontakte*, Bonn, S.1-28, 参照
- 17) 中埜芳之『ドイツ人がみた日本——ドイツ人の日本観形成に関する史的研究』（三修社、2005年）17-18頁。
- 18) 相川忠臣『出島の医学』（長崎文献社、2012年）27-28頁。
- 19) 石田純郎編著『緒方洪庵の蘭学』（思文閣出版、1992年）33-40頁。
- 20) 江戸時代に来日したドイツ人医師、博物学者、旅行家であり、ドイツのレムゴーに生まれた。ヨーロッパ各地で学んだ後、スウェーデンのロシア・ベルシア両国への使節団に加入し、オランダ東インド会社艦隊の軍医となり、1689年バタヴィアに派遣された。1690年長崎に着き、1692年まで商館医在任中、1691年・1692年の二度江戸へ参府した。日本人のオランダ語通詞の支援で日本の政治、社会、風俗、産業、動植物、鉱物などの研究を行った。その成果としての『日本誌』は死後、まず英訳本で出版された。
- 21) 十八世紀後半には、『日本誌』のオランダ語版が日本に輸入され、志筑忠雄（1760-1806）によって『鎖国論』として和訳され、徳川時代の知識人に「異民族相互間の交通遮断は天理に反する」というケンペルの日本観を伝えた。それを通じて、有識者の間では、海外交渉論への関心が高まり、「鎖国」制度に対する反省が喚起

- されたのである。小堀桂一郎『鎖国の思想』（中央公論社、1993年）144-157頁。
- 22) 松井洋子『ケンペルトとシーボルト——「鎖国」日本を語った異国人たち』（山川出版社、2010年）27-29頁。
  - 23) 松井洋子、前掲書、49-52頁。
  - 24) 宮崎道生『シーボルトと鎖国・開国日本』（思文閣出版、1997年）159頁。
  - 25) 中埜芳之、前掲書、26頁。
  - 26) 松井洋子、前掲書、88-89頁。
  - 27) Vgl. Veit Hammer, Timon Screech, *a.a.O.*, S.73-74.
  - 28) 大選帝侯フリードリヒ・ヴィルヘルム一世が明清中国や日本を含むオリエント趣味のため、早くも1682年にプロイセン・ブランデンブルグ勅許会社（Preußisch-brandenburgische Handelskompanie）を創立し、アジア及びアフリカでの貿易を開拓することを試した。その結果、多くの成果があげられず、設立から四十年ほどで放棄された。十八世紀以降、ドイツ全域における清国輸出の茶と磁器の大人気のため、ハンザ都市が引き続き積極的に清国貿易を推進した。1751年に発足したプロイセン・アジア勅許会社（Königlich-Preußische Asiatische Kompanie）は、1752年から1757年にかけて船団を派遣し清国の広州に寄港していた。しかし、イギリス東インド会社の貿易優位とプロイセン商船不足の制限のため、その時清国との貿易は、大規模とは言えなかったが、望んでいたような外交関係には発展しなかった。そうした状況はアヘン戦争後に継続した。1845年、広州滞在のハンザ商人の Theodor Johns が父親宛の書簡において「Der deutsche Cantonhandel hat gar keine Bedeutung. (広州でのドイツ貿易は何も意義もない)」と感嘆した。Vgl. Cord Eberspächer: *Profiteure des Opiumkriegs: Preußische Initiativen und deutsche Konsulate in China 1842-1859*, In: Mechthild Leutner, Andreas Steen, Xu Kai, Xu jian, Jürgen Kloosterhuis, Hu Wangli, Hu Zhongliang (Hg.) (2014): *Preußen, Deutschland und China Entwicklungslinien und Akteure (1842-1911)*, Münster, S.27-40. u.Vgl. Veit Hammer, Timon Screech, *a.a.O.*, S.72.
  - 29) アヘン戦争後、清国の五港の開市、特に香港がイギリス領の自由港となったのは、ドイツ商業界に清国での貿易拡大の希望を与えた。当時広州と香港の間に通っていたカール・ギュツラフが英清交渉の諸情報をドイツに送った。したがって、デュッセルドルフの官吏フリードリヒ・ヴィルヘルム・グルーベ（?-1845）が1844年2月に視察団を率いて清国に向い、広州から上海までカール・ギュツラフの支援を得て開港開市後の清国市場を広範な調査を行った。後にベルリンに送ったグルーベの調査報告はプロイセン政府の東アジア政策の調整に役立った。Vgl. Cord Eberspächer, *a.a.O.*, S.36-39. 日米和親条約締結後の半年、1854年8月にプロイセ

- ン外務省は、英仏蘭露の四ヶ国のベルリン駐在使館に対して、日本とその各国との関係、条約締結に関する各国政府の意見、日本との既成条約におけるプロイセン通商上の利益獲得の可能性などについての報告を求めた。各国政府が後に日本との条約締結を見通す各自の報告をベルリンに提出したが、とりわけ長期にわたって日本との絆が深いオランダは報告のほか、日本通と呼ばれたシーボルトの著書『日本の国際的航海通商に対する開放につきオランダ・ロシア両国尽力の原文書による記述』（本文三十六頁、独文と蘭文、付録の地図一枚、著作目録ある）をベルリンに送った。今宮新『初期日独通交史の研究』（鹿島研究所出版会、1971年）19-22頁。
- 30) プロイセンとオーストリアはドイツ関税同盟とドイツ連邦（*Deutscher Bund* 1815-1866）で唯一の二強であるが、双方はドイツ民族の主導権をめぐる競争を行っていた。小ドイツ主義の理念を持ってドイツ統一を目指したプロイセンは、連邦においてオーストリアの影響力に抵抗したほか、海外でのドイツ人の保護をめぐるオーストリアと争っていた。そして、プロイセンより、オーストリアは早くも軍艦の世界周航を計画し、太平天国反乱の早期に軍艦を上海に派遣した。それはプロイセンの危機感を喚起した。小池求『20世紀初頭の清朝とドイツ』（勁草書房、2015年）34頁。オーストリア軍艦世界周航計画について、鈴木楠緒子著『ドイツ帝国の成立と東アジア——遅れてきたプロイセンによる「開国」——』（ミネルヴァ書房、2012年）52-53頁、参照。
- 31) Bernd Martin, *The Prussian Expedition to the Far East (1860-1862), Newsletter for Modern Chinese History*, v.6 (1988), p.38-39.
- 32) 中井晶夫（訳）『オイレンブルク日本遠征記 上』（雄松堂、1969年）9-12頁。
- 33) Vgl. Dr.B.Siemers:*Preußische Kolonialpolitik 1861-62*, In: Japaninstitut Berlin u. Japanisch-Deutsches Kultur-Institut Tokio (Hg.): *Zeitschrift für Japanologie*, Jahrgang 1937, S.20-21. パリでの対話においても、欧文により Formosa と標示された中国の台湾が東アジアにおけるプロイセン植民地となるという建議はグロ男爵によって提出されたにいたるのである。cf. Bernd Martin, *op.cit.*, p.40.
- 34) Vgl. Peter Pantzer: *Die Eulenburg-Expedition in Japan*, In: Sebastian Dobson, Sven Saaler (Hg.) (2012): *Unter den Augen des Preußen-Adlers, Lithographien, Zeichnungen und Photographien der Teilnehmer der Eulenburg-Expedition in Japan, 1860-61*, München, S.47-63. 使節団派遣の前に、ドイツ連盟内部において、プロイセンは、オーストリアを除いて、東アジアにおいてプロイセンがドイツ諸領邦を代表する権利について、他のすべての領邦との合意を達成した。Vgl. Hans-Ulrich Wehler (1976): *Bismarck und der Imperialismus*, München, S.198.
- 35) 日普修好通商条約は、形式的にも、内容的にも、イギリス・フランスとの修好

通商条約を参考にしたものであり、第 21 条において「字漏生國のチプロマチーキアгент及びコンシュライル吏人より日本司人にいたす公事の書通は逸選語を以て書すへし尤此条約施行の時より五箇年の間は日本語又は和蘭語の譯文を添加ゆへし」と規定する。ここでは、「チプロマチーキアгент」とは、即ち領事を意味する。「コンシュライル吏人」は、即ち領事館員を意味する。幕府は、新参プロイセンとの条約を締結し、第 21 条を設定したことによって五年後の慶応 3 (1867) 年 12 月 7 日までにドイツ語に習熟する翻訳官・通訳官を養成する必要に迫られる。森川潤『ドイツ文化の移植基盤——幕末・明治初期ドイツ・ヴィッセンシャフトの研究——』（雄松堂、1997 年）7 頁。

- 36) 使節団が清国を訪れた 1861 年の春季には、アロー戦争の敗北のため、清国と西欧諸国との関係に新たな状況が生じていたのである。清国は北京で通商外交統括の総理衙門を設立し、天津で三口通商大臣を置いた。使節団にとって、交渉の場所と時期は難問である。特に 1861 年以降、広州に置いた、対外交渉を担当する五口通商大臣が上海に移駐し、総理衙門の管轄を受けたのである。坂野正高『近代中国政治外交史』（東京大学出版会、1973 年）46-47 頁。
- 37) 上海在住の西欧人が、商人の視点から清国の一層の門戸開放を期待していたため、使節団に天津交渉を行うことを勧めた。それに対して、天津駐在の英仏公使は、使節団の天津交渉が清国朝廷の排外派を刺激することと見られ、新生の総理衙門にも消極的影響をもたらすという政治的考慮から、使節団に上海の欽差に交渉申請書を提出し、天津交渉を回避することを示唆した。また、上海の欽差も使節団に天津交渉を断念すると提示した。鈴木楠緒子「オイレンブルク使節団の訪中と条約締結交渉——文明間対話の軌跡——」『史潮』新 52 号（2002 年）、94-96 頁。
- 38) 使節常駐による公使館の設置をめぐる交渉において、フランスやロシア両国の公使が支援を提供した。また、交渉中、中国語とドイツ語と、どちらが条約テキストの正本用語であるかという論争があった。したがって、調印された条約は漢文、独文、仏文の三つのテキストであるが、仏文テキストを正本と定めたのである（第五条）。坂野正高『近代中国外交史の研究』（岩波書店、1970 年）222-223 頁。鈴木楠緒子、前掲文、101 頁。
- 39) 使節団が文久元（1862）年にヨーロッパ渡航の大命により組織されたため、「文久遣欧使節団」とも呼ばれ、ヨーロッパへの最初の使節団のため、「第一回遣欧使節」とも呼ばれ、使節団長が竹内保徳（1807-1867）であるため、「竹内遣欧使節」とも呼ばれた。使節団は、1862 年 1 月から長崎を出発し、1863 年 1 月まで帰国したにいたるまで、フランス、イギリス、オランダ、プロイセン、ロシアなどを歴訪し、外交的交渉のほか、歴訪国での見学と視察を行い、近代ヨーロッパ文明を自ら

体験した。使節団構成の詳細について、宮永孝『文久二年のヨーロッパ報告』（新潮社、1990年）、13-16頁参考。使節団のドイツ滞在の詳細について、同書158-176頁参考。

- 40) 鈴木健夫・Paul Snowden・Günter Zobel『ヨーロッパ人の見た文久使節団——イギリス・ドイツ・ロシア——』（早稲田大学出版部、2005年）61-85頁。
- 41) 森川潤、前掲書、64頁。
- 42) 相川忠臣、前掲書、143-144頁。
- 43) 斌椿『乗槎筆記』（湖南人民出版社、1981年）42頁。
- 44) 斌椿、前掲書、43-44頁。
- 45) 志剛、前掲書、77-88頁。
- 46) Boston Daily Advertiser と Milwaukee Daily Sentinel の報道は、掲載日付や報道内容がすべて一致しているが、ただ前者が「The Chinese Embassy」という題目を加えた。報道記事原文：“Paris, Sept. 16, —Mr. Burlingame and the Chinese Embassy depart for Stockholm early next week.” “*The Chinese Embassy*” Boston Daily Advertiser, Sept. 17, 1869, and Milwaukee Daily Sentinel, Sept. 17, 1869.
- 47) “Minister Burlingame, and the rest of the Chinese Embassy will set out for Stockholm to-morrow, and purposed to return in six weeks, when they will go to Berlin.” Daily National Interlligencer and Washington Express, Sept. 22, 1869. “Mr. Burlingame and the Chinese Embassy will set out for Stockholm to-morrow. They intend to return in six weeks, when they will go to Berlin.” Morning Republican, Sept. 22, 1869.
- 48) “COPENHAGEN, October 26. —The Chinese Embassy, after having visited capitals of Denmanrk, Norway and Sweden, left to-day for the Netherlands.” “*Minister Burlingame*”, Daily National Intelligencer and Washington Express, Oct. 27, 1869. “Burlingame and the rest of Chinese have left Scandinavia for Holland.” “*Persons and Things*”, Milwaukee Daily Sentinel, Oct. 29, 1869.
- 49) “BERLIN, Nov. 22, —Mr. Burlingame has arrived here with the Chinese Embassy.” “*By the English Cable, The Chinese Embassy*”, The Daily Cleveland Herald, Nov. 23, 1869. “Berlin, Nov. 22, Mr. Burlingame has arrived here with the Chinese Embassy.” “*Cable News*” Bangor Daily Whig & Courier, Nov. 23, 1869. “BERLIN, Nov. 22. Mr. Burlingame has arrived here with the Chinese Embassy.” “*News by Cable*” Milwaukee Daily Sentinel, Nov. 23, 1869.
- 50) Boston Daily Advertiser, Nov. 23, 1869.
- 51) ワシントンで調印された蒲安臣条約、及びロンドンで協議されたイギリス側の

声明は北京朝廷において激しい論争を起こした。それによって恭親王を始めとする開明派や清朝保守派が常に出したそれぞれのインフォメーションは、米英政府や英字新聞に相当の困惑を与えたのである。北京朝廷の条約をめぐる政争の詳細について、cf. F.W.Williams, *Anson Burlingame and the First Chinese Mission to Foreign Powers* (New York: Charles Scribner's Sons, 1912) pp.192.

- 52) “The Government has received a telegram from the Hon. Anson Burlingame, explaining to the present administration, what was very well known to Mr. Seward, that the Chinese Government did not expect to ratify or finally act upon any of the treaties negotiated by him and his confreres until his return from his great diplomatic tour. During his sojourn in the United States, Mr. Burlingame made arrangements with prominent American inventors and railroad men to visit China, on the occasion of his return, and explained to them that until the treaties are ratified it will be useless for them to attempt to commence business there.” *The Daily Cleveland Herald*, Sept. 01, 1869.
- 53) “—The Paris correspondent of the *Pall Mall Gazette* says that the despatch which Mr. Burlingame received from Prince Kung so shortly after the malicious telegram which stated that the treaty with the United States was disapproved by the Chinese Government, thanks that gentlemen in the warmest manner for his services, and says that in accordance with his own desire the treaty will only be ratified on Mr. Burlingame's return.” *Boston Daily Advertiser*, Sept. 18, 1869.
- 54) “The *Republican's Washington specials* says that the British despatch announcing the rejection of the Burlingame treaty is not believed by the authorities. It is evidently made upon the interests of the English merchants at the treaty ports, who all along have been bitterly hostile to the new policy represented by the Burlingame Embassy. All the English papers printed in Shanghai, Hongkong, and other ports, have been systematic in their denunciation. The whole despatch is regarded as a weak invention of the enemies of China and the United States.” *The Hawaiian Gazette* Sept. 22, 1869.
- 55) “*The China Mission*”, *The Daily Cleveland Herald*, Oct. 30, 1869.
- 56) 志剛の記憶は、プロイセン外務省を訪れたのが1869年11月30日(旧暦同治8年10月27日)である。また、志剛の記載では、訪問当日、外相のビスマルクが病気のため欠席し、使節団一行が「署任大臣」という外相代行の歓迎を受けたということである。志剛、前掲書、83頁。以下のとおり、当時の英字新聞の掲載日を標準とする。

- 57) “BERLIN, Dec.1.—Mr. Burlingame and the other members of the Chinese Embassy were received at the Foreign Office today. The American treaty will probably be the base of that made with Prussia.” *“The Chinese Embassy at Berlin”*, Boston Daily Advertiser, Dec.02, 1869.
- 58) 国王謁見に関しては志剛の記載がやや詳細である。「【同治8年10月】二十九日、見其君主威廉第一、親遞國書。是日、司禮官帶四輪四馬車來接。自寓至大宮、間列兵隊。至宮、排班進、旁列衛士、彩衣執戟。先至其外廳、次由禮官分班帶至朝所布君【プロイセン国王】前、鞠躬為禮。布君立於方臺位前。蒲使面陳云：‘予及同寅、謹奉國書於君主之前。中國皇上派我等代達上意、切愿貴君主身眷福樂安康、并所屬人民興隆茂盛。’布君答云：‘我格外歡喜接得國書。中國皇上派爾等來我跟前為欽使、我一心欣切友誼。甚望與爾皇帝奉天命而治理朝廷、兩國共享平福。我喜爾等到此、趁此機會發出與中國皇帝相好心意。’蒲使恭齎國書、親遞於布君親接、禮畢、鞠躬退出」志剛、前掲書、83頁。
- 59) *“Mr. Burlingame”*, The Daily Cleveland Herald, Dec.03, 1869.
- 60) Bangor Daily Whig & Courier, Dec.04, 1869.
- 61) *“Mr. Burlingame before King William”*, Boston Daily Advertiser, Dec.04, 1869.
- 62) Daily Arkansas Gazette, Dec.04, 1869.
- 63) 両紙報道の内容がほぼ一致している。“BERLIN, December 4.—The King and Queen of Prussia to-day entertained Burlingame, and the members of the Chinese Embassy, at a grand dinner, at which 80 guests were present.” *“Burlingame in Berlin”*, Daily Evening Bulletin, Dec.06, 1869. “Berlin, Dec.4. The King and Queen of Prussia today entertained Mr. Burlingame and the members of the Chinese Embassy at a grand dinner. There were eight guests present.” Milwaukee Daily Sentinel, Dec.06, 1869.
- 64) “The Chinese Embassy was yesterday received by the King and Queen, at the royal palace, with the most imposing ceremonies. Burlingame presented an address and was received with marked attention by Count von Bismarck, who declared the warmest friendship of Prussia and North Germany with the United States, and pledged the hearty co-operation of Prussia with the Embassy in its movement. The reception was a grand affair.” Daily Arkansas Gazette, Dec.05, 1869.
- 65) “New York, December 1.—A Times Correspondence from Peking says the Chinese Government have dearly intimated that Mr. Burlingame’s Treaty has not been rejected, but action on it is only deferred, it being thought best to wait



until the results of the negotiations with other countries are received, when the whole subject will be disposed of at once. The Imperial confidence in Mr. Burlingame is unshaken. The Mission College is not a failure, as has been asserted.” “*The Chinese Government and Burlingame*”, Daily Evening Bulletin, Dec. 01, 1869.

- 66) ほかの両紙の報道もここで列挙される。” London, Dec. 10— (Special to the New York Herald) —Mr. Burlingame has received information that the treaty made with the United States has been ratified by the Chinese government. Mr. Brown, the secretary of the Chinese embassy, is on his way to Washington, via California.” North American and United States Gazette, Dec. 11, 1869. “The Chinese Emperor has ratified the commercial treaty with this country, which was some time since agreed upon between Burlingame and his Chinese Ambassadors and our Government.” Milwaukee Daily Sentinel, Dec. 13, 1869.
- 67) “London, Dec. 10. Mr. Burlingame, the chief of the Chinese Embassy, has received information that the treaty made by him with the United States, has been ratified by the Chinese Government. J. McLeary Brown, the secretary of the Chinese Embassy, is on his way to Washington from Peking, via California.” “*The Chinese Treaty*”, Bangor Daily Whig & Courier, Dec. 13, 1869.
- 68) 同 20 日付の米紙、Boston Daily Advertiser のほか、Daily Evening Bulletin や Milwaukee Daily Sentinel はほぼ同じ内容の記事を掲載した。
- 69) “BERLIN, Dec. 17.—Minister Burlingame has received official notice that the Chinese Government is fully satisfied with the action of the Embassy of which Mr. Burlingame is the head. This confirms previous reports to that effect.” “*Burlingame’s official conduct approved*”, Boston Daily Advertiser, Dec. 20, 1869.
- 70) 志剛の記載では、当日プロイセン外務省への訪問は、「【同治 8 年 12 月】初三日、往拜其外部大臣畢司馬克。」という記録しか書き込んでいない。交渉会談についての詳細なインフォメーションはなにも残されなかった。ただし、ビスマルクについて「其人身長語慢、好深沉之思、歐洲之偉人也」という深い印象が残り、記録された。志剛、前掲書、84 頁。
- 71) Milwaukee Daily Sentinel は蒲安臣とビスマルクとの個人的関係をしか報道しなかった。“Berlin, Jan. 18 The relations between Count Von Bismarck and Mr. Burlingame, of the Chinese Embassy, are of the closest and most cordial character. They have frequent conferences, and there is good reason to believe that a treaty with China has been adjusted on the most satisfactory terms.” Milwaukee

- Daily Sentinel, Jan.19, 1870.
- 72) “A correspondence between Mr. Burlingame, as chief of the Chinese Embassy, and Count Von Bismarck, is published. The Prussian government expresses its anxiety for the restoration of the Imperial authority throughout China as the best guaranty of order and safety for foreigners.” Boston Daily Advertiser, Jan.21, 1870.
- 73) “BERLIN, Jan.17.—The negotiations between the Prussian government and the Chinese embassy were concluded today. BERLIN, Jan.18.—The relations between Count Von Bismarck and Mr. Burlingame, of the Chinese Embassy, are of the closest and most cordial character. They have frequent conferences, and there is good reason to believe that a treaty with China has been adjusted on the most satisfactory terms.” “*Mr. Burlingame’s Negotiations*” and “*Mr. Burlingame and Count von Bismarck*”, Boston Daily Advertiser, Jan.19, 1870.
- 74) The Times に掲載されたビスマルク書簡のイギリス語テキストが 1870 年 2 月 16 日付の米紙 Daily Evening Bulletin によって「Bismarck on Chinese Policy」という題名で全文で転載された。
- 75) “*China and Northern Germany*”, The Times, Jan. 22, 1870.
- 76) “It is a matter of great satisfaction to me that I should have received the first direct diplomatic communication from the Chinese Government to this country; and I trust that the intercourse thus established in accordance with the law of nations will prove equally beneficial for both parties. The reception you have met with here, and of which you and other members of the Embassy have been pleased to convey to me so warm an acknowledgment, testifies the sympathy of the German people with China, and its desire to cultivate with her the most friendly relation. I am happy to add, that the North German Confederation and his Majesty the King, my most gracious Sovereign, being the head of the same, will not cease to observe a policy concurring with that popular disposition. They are convinced that, in the intercourse of our respective countries, the interest of Germany will best be served by what is conducive and necessary to the well-being of China—that is to say, the activity of a Central Government enjoying respect, authority, and power commensurate to the magnitude of the empire, both in territorial extent and number of population.” *ibid.*
- 77) “By maintaining order and security of life and property throughout the realm, such a Government will afford the best guaranty for fair and equitable dealings

- on the part of the servants and subjects of the Emperor, the most efficacious and universal protection to our countrymen resorting or trading to China, the safest way to secure the execution of treaties and to obtain redress of grievances.” *ibid.*
- 78) “When unharassed by internal dissensions and foreign conflicts, the Government would naturally concentrate its energies upon the further development of the boundless resources of the country; industry at home and commerce abroad would grow together, and increasing prosperity would, it may be trusted, strengthen the hands and fortify the determination of the Government to follow up the policy of active intercourse, of amity and mutual confidence with foreign nations as initiated by your Mission.” *ibid.*
- 79) “Resting upon these suppositions, the North German Confederation will ever be ready to suit its attitude to the exigencies of that authority.” *ibid.*
- 80) “There is great diversity of opinion. One party maintains that as the treaties had their origin in force, pressure must be continued in their support, and that any relaxation of this system would be fatal to progress. The other party holds that this system is neither wise nor safe; that while it may be convenient for the moment, in the end it must be destructive of the interests of its promoters.” *ibid.*
- 81) “It is with great satisfaction that I recall to the mind of your Excellency the action in favour of the latter party on the part of the treaty Powers, already visited by the Mission. The treaty concluded with the United States recognizes broadly the right of China to the jurisdiction of its own affairs, and offers substantial protection to the Chinese in California.” *ibid.*
- 82) “The cordial reception of the Mission by the Emperor of France, and the just views expressed by him at that time, as well as the subsequent declarations of his Ministers in the same sense, together with the gratifying responses by direct letter to the Emperor of China on the part of the Sovereigns of Holland, Denmark, and Sweden, are assurances of a general desire for harmonious and considerate action toward China.” *ibid.*
- 83) “I assure your Excellency that the Chinese Government will appreciate and respond to the generous spirit of the Western Powers; indeed, we just learn that that nation, which has been charged by its enemies with a disposition to retrograde, has made large concessions in favour of foreign nations.” *ibid.*
- 84) 志剛、前掲書、88頁。
- 85) “PARIS, FEB. 13. The Japanese Embassy is to quit Paris in the course of next

week, The Embassy proceeds to Belgium, and thence to Holland, where it will arrive towards the end of the month.” “*The Japanese Embassy*”, The Times, Feb.14, 1873.

“BRUSSELS, FEB. 18. The Japanese Embassy arrived here this morning.” “*The Japanese Embassy*”, The Times, Feb.19, 1873.

“The HAGUE, FEB. 25. The Japanese Embassy arrived here yesterday evening, and were received this after afternoon by the King in solemn audience.” “*The Japanese Embassy*”, The Times, Feb. 26, 1873.

86) ベルリンに向けた時点までに、五十名ほどの使節団は日本を離れて一年以上を経過しており、すでに二十名ほどの団員が帰国していた。それなのに、全権大使岩倉以外にも、四名の副使がまだ同行していた。彼らのうち木戸はロシアの視察に固執し、大久保はベルリン訪問後に帰朝した。使節団がエッセンを経由したのは、エッセンにある本部を置く、諸戦争でプロイセン・ドイツ軍 (Reichswehr) に重砲を供給した、これまで世界に名をはせているクルップ製鋼工場を訪問したからである。使節団一行は、エッセンで一部がクルップの客館に、ほかがホテルに一泊した。同8日に大製鋼工場を見学し、同工場の守警団の説明を受け、クルップの新しい私邸を訪問した。その工場の規模や生産力は、使節団全員にとって相当の感銘を与えた。同日夜、夜行列車で使節団がベルリンに向かった。Ulrich Wattenberg 著・望田幸男訳「ドイツ 二つの新興国の出会い——一八七三年三月七～二十八日、四月十五～十七日、五月一～八日」麻田貞雄 (訳者代表) 『欧米から見た岩倉使節団』(ミネルヴァ書房、2002年) 158-159頁。cf. Kunitake Kume (comp.), Martin Collcutt(trans.), Graham Healey and Chushichi Tsuzuki (eds.), *The Iwakura Embassy 1871-73: A True Account of the Ambassador Extraordinary & Plenipotentiary's Journey of Observation Through the United States of America and Europa*, vol. III *Continental Europe*, 1 (Chiba: The Japan Documents, 2002) pp.286-291.

87) “BERLIN, MARCH 9. The Mercantile Treaties proposed by the Japanese Special Embassy have been rejected in Paris and Amsterdam.” “*Japanese Commercial Treaties*”, The Times, Mar.10, 1873.

88) 1871年以降、フォン・ビスマルク伯爵 (Graf von Bismarck-Schönhausen) は「Fürst von Bismarck」と呼ばれていた。ドイツ貴族階級では、「Fürst」は漢文で「侯爵」と意味し、日本華族階級のうち「公爵」にあたる高級貴族の封号である。しかしながら、「Fürst」という封号は、神聖ローマ帝国時代において、一般的に主権を持ったドイツ諸侯の称号と指し、普通の「親王」と呼ばれたことがある。そ

ここで、英紙が下記の報道でビスマルクの爵位を「Prince」と記したことはさらなる検討する余地がある。

- 89) “BERLIN, MARCH 11. The member of the Japanese Embassy drove to-day with great ceremony to the Imperial Castle, where they were received by the Emperor, in the presence of Prince Bismark and the high dignitaries of the Court.” “*The Japanese Embassy*”, The Times, Mar.12, 1873. cf. Kume and Collcutt, *op.cit.* p307.
- 90) 同11日付の独字新聞 Neue Preußische Zeitung (11 März 1873) が使節団の皇帝謁見を報じていた。Ulrich Wattenberg、前掲文、注(7)、21頁。
- 91) Ulrich Wattenberg、前掲文、注(8)、21頁。
- 92) Ulrich Wattenberg、前掲文、161-162頁。
- 93) “..In the Diplomatic Gallery nearly all the foreign representatives were present, including the Japanese Embassy, in European dress...” “*Opening of the German Parliament*”, The Times, Mar.13, 1873.
- 94) Ulrich Wattenberg、前掲文、162頁。
- 95) Kume and Collcutt, *op.cit.*, pp.323-325.
- 96) Kume and Collcutt, *op.cit.* n. 4, p.325.
- 97) Ulrich Wattenberg、前掲文、164頁。大使随行の久米邦武がビスマルクの演説に対して「For the envoys in the company at the table during this banquet, these were significant words indeed, and we relished our chance to learn from the prince’s eloquent words, knowing full well what a master tactician he is in the world of politics. (この晩餐会において出席した各国の公使たちにとって、これは確かに印象深い言葉であるが、我々は、侯爵の雄弁な言葉を覚えることを楽しみにしていたが、この政治的世界においても偉大な戦略大家としての氏の地位を十分に了解している)」という個人的評価を記録した。Kume and Collcutt, *op.cit.*, pp.324-325.
- 98) Kume and Collcutt, *op.cit.*, pp.326-339.
- 99) Kume and Collcutt, *op.cit.*, n.7, p.340. Ulrich Wattenberg、前掲文、166-167頁。
- 100) “A few weeks ago there was telegraphed from Europe what purported to be an account of an interview between the Japanese Embassy and a professor of a German college on the advisability of Japan adopting Christianity as the established religion of the Empire. The papers received by the present mail intimate that some such proposition has already agitated the minds of the educated classes in Japan. The Japan *Gazette* prints a translation of letter which

- has appeared in the native paper, *Minato Shimibun*, under the heading of the “Christian Religion.” “*Christianity in Japan*”, Daily Evening Bulletin, May 31, 1873.
- 101) “The light zephyr of civilization from the West, that until a very recent period in the world’s history but faintly reached even the most advanced minds of Japan, has now assumed a vigor and a refreshing influence scarcely anticipated by the most sanguine watchers of Japanese events. The country is now fairly under the refining influence of extended relations with the world...” “*Japan*”, The Hawaiian Gazette, Mar.26, 1873.
- 102) “One important sign of the progress of Japan is evinced by the more frequent audience given by the Emperor and Empress to Foreign Representatives and others. On the 10th inst. Mrs. De Long and Mrs. De Butzow, accompanied by Mr. De Long, American Minister, and Mr. De Butzow, Russian *Chargé d’ Affaires*, visited their Imperial Majesties at Tokio (Yedo). Congratulatory speeches were exchanged, the Mikado acknowledging the attention shown the members of the Japanese Embassy by the people of the United States as being exceedingly gratifying.” *ibid.*
- 103) Ulrich Wattenberg、前掲文、165-166 頁。
- 104) Kume and Collcutt, *op.cit.*, n.11, p.359.
- 105) Kume and Collcutt, *op.cit.*, n.15, p.359.
- 106) Colin Matthew (編) 君塚直隆 (監訳) 『オックスフォード ブリテン諸島の歴史第9巻 19世紀 1815年～1910年』(慶応義塾大学出版会、2009年) 188-208頁。
- 107) 小池求、前掲書、39-40頁。
- 108) 鹿島守之助『日本外交史 別巻1 ビスマルクの平和政策』(鹿島研究所出版会、1971年) 157-158頁。
- 109) René Girault 著・渡邊啓貴 (ほか) 訳『国際関係史 1871～1914年——ヨーロッパ外交、民族と帝国主義——』(未来社、1998年) 112頁。
- 110) “BERLIN, AUG. 5. The Official Gazette of the Empire publishes the new standing regulation adopted by the Chinese Government in consequence of the acts of piracy on the Chinese coast some time back.” “*Germany and China*”, The Times, Aug.07, 1876.
- 111) 当時ベルリンに赴いた清国公使は元イギリス駐在清国公使館参事官の劉錫鴻 (? -1891年) 氏であり、最初のドイツ駐在清国公使である。劉氏が、清朝科挙の一等出身(挙人のみ)という身分で清国の初代イギリス駐在公使郭嵩燾(1818-1891)の幕僚となった。後に郭氏との個人的恩怨のため、中国近代化の洋務運動

に大反対の意見を持ったことから、草創期の中国近代外交機関における保守派重鎮であったとみられる。1878年8月、劉氏は郭氏とともに清国政府によって呼び戻された。Vgl. Zhongliang Hu: *Liu Xihong-Der erste chinesische Gesandte in Deutschland*, In: Mechthild Leutner, Andreas Steen, Xu Kai, Xu jian, Jürgen Kloosterhuis, Hu Wangli, Hu Zhongliang (Hg.) (2014): *Preußen, Deutschland und China Entwicklungslinien und Akteure (1842-1911)*, Münster, S.161-193. 劉氏の言動と思想について、手代木有兎『清末中国の西洋体験と文明観』（汲古書院、2013年）28-43頁、参照。

- 112) “The Chinese Minister at BERLIN. — On the 26th ult. The Chinese Minister in Berlin, his Excellency Liu Ta jen, had an audience with the Emperor of Germany at the Imperial Palace in Berlin, for the purpose of delivering into the hands of the Emperor his credential as Minister to the German Court. In addressing His Majesty the Minister extolled the friendly relations which have existed without interruption between China and Germany, and in reply the Emperor said that he reciprocated the friendly feelings with China had towards Germany, and at the same time His Majesty welcomed the newly accredited Chinese Minister on his arrival at the capital. — London and China Telegraph.” *The Times*, Dec.05, 1877.
- 113) “...I resided for some time in Tientsin, and had many opportunities of seeing the troops drilled and manoeuvred about that city by German officers, engaged by the Viceroy, who received most liberal salaries, and who have acquired such influence that most of, if not all, the war material for the army is supplied by German contractors, and if there be any necessity for diplomatic or consular assistance Germans have only to ask and have in China the official introductions which have enabled them to acquire the commanding position they now occupy in the councils and commerce of China...” “*China and Germany*”, written by Joseph Samuel, *The Times*, Sept.11, 1883.
- 114) “...No employment in the Chinese Navy could be found for them, while German officers were every day becoming more and more active and influential. At last the Viceroy, in the most honourable manner, compounded with the French officers, and paid them in full for the whole term of their engagement. They left Tientsin by the next steamer for Europe...” *ibid.*
- 115) “...A reference to the Directory of Tientsin will give the name of an officer who has acquired a reputation in the Franco-German war, who would doubtless

serve China in case of need. From personal observation I cannot say what practice the field artillery make, but I have heard it is excellent. But I have seen them at drill and on the road. Guns well kept and clean, men smart, orderly, and the strong Mongolian teams attached to the guns and carts fit for any work....”  
*ibid.*

- 116) 小池求、前掲書、40頁。
- 117) Elizabeth Kaske (2002) : *Bismarcks Missionäre: Deutsche Militärinstruktoren in China 1884-1890*, Wiesbaden, S.26-27.
- 118) 小池求、前掲書、41-42頁。
- 119) “While treaty revision is crawling on with steps so slow and painful that after 27 meetings, spread over a period of 11 months, the members of the Conference have as yet barely finished one-half of their thorny task, the public mind in Japan is occupied for the time with two other questions of considerable moment and significance. One is the rapid increase of German influence and popularity, as apparent in the whole attitude of the present Envy from Berlin, in the growth of German commerce, and in the recent appointment of several German professors, architects, and others to posts in the Japanese service. The other is a group of social reforms and novelties, having as their main object an improvement of the position of women in Japan....Both of the subjects were discussed in The Times of the 25th of December, by a correspondent who, as regards the first of them, represented that the recent shower of German appointments is only the natural fruit of Japan’s choice of the parliamentary and administrative institutions of Germany as models for her own new Constitution which is to be established in 1890....” “*England, Germany, and Japan*”, The Times, May 14, 1887.
- 120) “...In 1882, when Great Britain took the lead in rejecting Japan’s scheme of revision...the Cabinet in Berlin was beginning to give active attention to projects for extending German commerce and colonial emigration. It happened that Count Ito, now Premier of Japan, visited Europe at this juncture, and spent some months in the German capital, studying the legislative and administrative systems of the Empire. During the period of his stay he naturally became intimate with Prince Bismarck, and it is reasonable to conclude that the latter then learned all particulars about Japan’s condition and prospects. The great Chancellor is too far-seeing a statesman to have overlooked the opportunity that was presented by Japan’s burning desire to be freed from the thralldom of the



treaties...Prince Bismarck, doubtless, also saw how great a chance of distancing all rivals lay within the reach of the Western Powers that should succeed in delivering Japan from her difficulties. England had thus far disregarded her opportunity..." *ibid.*

121) "...No Japanese statesmen — Count Ito least at all — can be blind to the overshadowing dimensions of British influence in the East, or forget how much of his country's recent material progress is due to English impulse and aid. Those who imagine that Prince Ito can have pledged himself in 1882 to follow any set path of international partiality not only mistake the man and underrate the prudent influence of his distinguished colleague, Count Inoue, but also forget the bitter training which Japan had undergone during many years ago of fruitless effort to soften the prejudices and reconcile the conflicting interests of the 16 signatories of her treaties..." *ibid.*

122) "German traders show a degree of friendly consideration and courtesy in intercourse with their customers which goes a long way with the polite and sensitive Japanese. They associate freely with Japanese merchants, learn the language of the country, and seek Japanese co-operation in business matters. It is right to add that the German *employés* of the Government are an able and excellent body of men, well chosen, highly skilled in their several lines, and serving the Japanese with zeal and fidelity." *ibid.*

123) *ibid.*

124) 森川潤編『木戸孝允をめぐるドイツ・コネクションの形成』（広島修道大学総合研究所、1995年）44-50頁。

125) "J. M. Brown, of the Chinese Embassy, expects to join Mr. Burlingame in St. Petersburg, where the Embassy will remain until negotiations with Russia are completed, and then go to Brussels and Belgium. Mr. Brown says that he saw the correspondence which passed between Burlingame and Count Bismarck, and that the same policy was adopted with Prussia which has been adopted with America, England and France, to-wit; A policy of forbearance and consideration toward China." Daily Arkansas Gazette, Feb. 08, 1870

126) 末川清「久米邦武にとってのプロイセン」西川長夫・松宮秀治編『『米欧回覧実記』を読む — 1870年第一の世界と日本 —』（法律文化社、1995年）115-118頁。

127) 石井扶桑雄「久米邦武の文明観から見たプロイセン」西川長夫・松宮秀治編『『米欧回覧実記』を読む — 1870年第一の世界と日本 —』（法律文化社、1995年）

133-136 頁。

128) 明治元年から八年にかけて、ドイツへの日本人留学生の詳細について、宮永孝『日独文化人物交流史』（三修社、1993 年）323-327 頁、参照。

129) 森川潤『明治初年のドイツ留学生』（広島修道大学総合研究所、1994 年）28-29 頁。